

325

49-73

高桑駒吉編纂

中等西洋史



發兌 大日本圖書株式會社



## 例言

本書は中等教育に於ける西洋歴史の教科用に供せんが爲め編纂せるものなり、然れども予の研鑽未熟なる時に或は誤謬を傳へ或は失當の處無きを保し難し、幸に讀者の指摘を得ば他日必ず訂正すべし。

西洋史と東洋史とは相俟ちて完全なる世界史をなす、故に事の彼此相關聯せるものは勉めて其要領を擧げたり。

地名人名及び各種事物の名稱は悉く原音に従ひしと雖も、從來我邦に廣く行はるゝ漢字は必しも原音に拘泥せず之を採用せり。

希臘羅馬の古代に詳に近世に疎なるは從來歴史の弊、近世にのみ詳に古代及び中世を疎略にし、歐洲國民興起の原因及



び其文化の源泉を忽にするも亦近時公行せる歴史の弊なり、故に本書に於ては成るべく是等の弊を避け一方に偏せず繁簡疎密其宜しきを得るを勉めたり。

史論は史實を學んで後研究すべきもの、史實を知らば史論研究の途自ら開けん、然りと雖も、初めて史を學ぶものは先づ史論によらざれば史實を解し難し、是れ本書が間々簡明正確なる先哲の史論を挿む所以なり。

予は第一高等學校教授箕作元八、文科大學教授坪井九馬三兩先生の講筵に侍せしを以て、直間接に其裨益を受けたる所尠からず、此に特書して感謝の意を表す。

明治三十一年四月

編者識

### 中等西洋史目次

#### 第一編 古代史

第一部 古代東方諸國……………一

第一章 埃及……………一

第二章 猶太……………六

第三章 フォイニケ……………九

第四章 ハビロニヤ及びアッシリヤ……………一一

第五章 波斯……………一五

第二部 希臘……………一九

第一期 鴻荒時代より波斯戰爭に至る

(太古—紀元前五〇〇年)



第一章 古代希臘の形勢……………二二

第二章 スバルタ及び雅典の勃興……………二四

第二期 波斯戰爭よりマケドニア盟主時代に至る(紀元前五〇〇年—同三三八年)

第一章 波斯戰爭……………二九

第二章 雅典の隆盛とペリクレス時代……………三三

第三章 ペロポネテソス戰爭とスバルタ、テーベの覇……………三四

第三期 マケドニア盟主時代

第一章 フヒリッポス王の覇圖……………三七

第二章 アレクサンドロス大王と其遠征……………三九

希臘の文明……………四三

第三部 羅馬……………四六

第一期 王政時代(紀元前七五三年—同五一〇年)……………七四

第二期 共和時代(紀元前五一〇年—同三一年)

第一章 貴族と平民との爭權……………五〇

第二章 以太利内地征服時代……………五四

第三章 外國征服時代……………五六

第四章 内亂時代……………六一

第三期 帝政時代(紀元前三一年—紀元後四七六年)



第一章 羅馬諸帝……………七〇

第二章 基督教の蔓延……………七六

第三章 チュートン人……………七九

第四章 西羅馬帝國の末路……………八一

羅馬の文明……………八五

### 第二編 中世史……………八八

中世前紀 西羅馬帝國の滅亡よりカール大帝國の建設に至る(紀元四七六年—同八〇〇年)

第一章 チュートン種族の王國及び東羅馬帝國……………八九

1.20  
- .70  
/ 90

第二章 サラセン帝國の勃興……………九五

第三章 フランク王國の興隆……………九九

中世後期 カール大帝國の建設より第  
十五世紀前後に至る(第九世紀  
—第十五世紀前後)

第一章 カール大帝國及び其分裂……………一〇四

第二章 北人の侵略……………一〇八

第三章 神聖羅馬帝國……………一一一

第四章 羅馬法王……………一二三

第五章 十字軍……………一二七

第六章 中世に於ける宗教の勢力……………一二三

第七章 封建制度……………一二六



第八章 市府の興隆……………一三二

第九章 蒙古人及び土耳其人の侵寇……………一三三

第十章 歐洲列國の興起……………一四一

    獨逸……………一四一……佛蘭西……………一四五

    英吉利……………一四九……以太利……………一五三

    西班牙及び葡萄牙……………一五六……スカンヂ

    ナヰア及び露西亞……………一五八

### 第三編 近世史

第一期 變遷時期(第十五世紀前後)

第一章 總論……………一六〇

第二章 文運の復興及び印刷術の發明……………一六五

第三章 地理學上及び天文學上の發見……………一七二

第四章 專制君主政の固定と政畧の一變……………一八〇

第五章 兵制の變化……………一八二

第六章 宗教改革の計畫……………一八五

第二期 宗教改革よりエストフハー  
レンの條約に至る(紀元一五  
一七年—同一六四八年)

第一章 宗教改革の初期……………一八九

第二章 カール五世と宗教改革……………一九四

第三章 宗教改革の反動……………二〇〇

第四章 ティデルラントの獨立及び其  
隆盛……………二〇四

第五章 英國宗教改革の結果及び海軍



の發達……………二二〇

第六章 佛國宗教改革の結果……………二二六

第七章 三十年戦争……………二二一

第八章 文明……………二二八

第三期 エストフ・ハーレン條約より

佛蘭西革命に至る(紀元一六四八年—同一七八九年)

第一章 ルイ十四世の覇圖……………二三〇

第二章 英國の革命とスチュアルト朝……………二三六

第三章 西班牙王位繼承戦争……………二四七

第四章 瑞典波蘭普魯西の盛衰……………二五一

第五章 露西亞の勃興と北方大戦争……………二五五

第六章 普魯西の興隆……………二五九

第七章 波蘭の分割……………二六六

第八章 佛國革命以前歐洲列國の大勢……………二六八

第九章 北亞米利加合衆國の獨立……………二七一

第十章 文明……………二七四

第四期 佛蘭西革命より維也納會議に至る (紀元一七八九年—一八一五年)

第一章 革命の原因……………二七五

第二章 國民議會と立法議會……………二七八

第三章 國民集會……………二八三

第四章 監督廳政治と執政政治……………二八六



### 第四編 最近世史

#### 總論

第五章	佛帝ナポレオン一世の盛衰……………	二九二
第六章	文明……………	三〇二
第一章	維也納會議前後の歐洲各國……………	三〇五
第二章	佛國の政變及び其波及……………	三一〇
第三章	佛王ナポレオン三世及び佛共和國……………	三一五
第四章	西班牙及び葡萄牙の内亂……………	三二〇
第五章	獨逸の統一……………	三二三
第六章	以太利の統一……………	三三八

第七章	英國の内治……………	三三二
第八章	希臘の獨立及び東方問題……………	三三五
第九章	亞米利加諸國……………	三四三
第十章	西方の東漸……………	三五〇
第十一章	文明……………	三五六

#### 地圖

(一)	古代世界圖……………	一九
(二)	西南亞細亞及び埃及……………	一九
(三)	希臘之圖……………	一九
(四)	羅馬帝國の最大版圖……………	七三
(五)	チュートン人種移轉後の歐洲……………	八九



(六) 八世紀の半頃に於ける回々教國……………八九

(七) カール大帝國及び其分裂……………八九

(八) カール五世の時に於ける歐洲……………一九三

(九) 十六世紀に於ける西班牙及び葡萄  
牙の殖民地……………一九三

(十) 十七十八世紀之歐洲……………二二二

(十一) 一八一二年の歐洲……………三〇五

(十二) 一八一五年維也納會議以後の歐洲……………三〇五

附 録

- (一) 和洋對照畧年表
- (二) 歐羅亞非利加人種表

中等西洋史

高桑駒吉編

第一編 古代史

第一部 古代東方諸國

總論

ニルス  
の沿岸及び  
チグリス、  
エウフラテス  
兩河の  
近傍は、氣候炎熱、土壤膏腴にして人口夙に繁殖せり、故を以て  
重要なる影響を世界に與へたる、埃及及び西南亞細亞の諸國  
は早く是等の地方に勃興せり、就中其建國の最も古きを埃及  
國となす。

第一章 埃及



ニルス河

埃及は世界最古國の一にして史家或は其建國を紀元前二千七百餘年の古に置く。此の國は地中海の南岸ニルス河の下流に位し、古昔北方の三角洲を下埃及と稱し、是より河流を溯ること凡二百四十里の間を上埃及と稱せり。毎歲七月より十一月に至るの間ニルス河漲溢し膏腴なる泥土を遺して河畔の地を沃壤たらしめ、且つ氣候炎熱なるを以て諸穀大に熟し人民盛に繁殖せり。是れ埃及が太古蒙昧の世にありて早く既に特種の文化を發揚せる所以にして古人の埃及をニルス河の恩賜と稱せるは、又理無きにあらず。

埃及の國王は專制の君主にして、（日の神の子の義）と稱し、國民は僧侶、武士、商工、農牧の四階級に分れたり、就中最高にして權勢ある者を僧侶となす、常に祭政を掌り、傍ら人民に學術

國王及び國民の階級

古帝國

を教へ、且つ醫師、裁判官、建築師等の職をも兼ねたり、次は武士にして、商工之に次ぎ、農民及ひ牧者は最下に位せり。

埃及建國の初は詳ならずと雖も、傳説に據れば、メチスなる王諸部落を統一して埃及國を創建し、都をメムフロスに定め、次で各朝の諸王は領土を南方に擴張して數多の金字塔を建設したり、有名なるギゼーの大金字塔は、クフ王の建設に係る。此の間メムフロスは、衰へ國都は、テペーに移れり。以上を古帝國と稱し、其盛況を呈せしこと、今日に存する種々の紀念物に徴して知るを得べし。

紀元前二一〇〇年頃亞拉比亞の北方より遊牧の蕃族侵入し來り、全國を征服して其酋長王位に即き、虐政を施して人民を苦しめ、古帝國時代の文化を撲滅せり、之を中帝國と稱し、其諸

中帝國



新帝國

王を ハクシヤス (牧王の義ヒクソス) と稱せり。後四百餘年を経て、紀元前一六五〇年頃、人民反して ハクシヤス を國外に放逐し、アモシス (或はアム) なる者起て新帝國を テベ に創建せり。次で アメン ホブテス、ト、メズ、ラメツス (或はラムセス) ともいふ) 大王等の君主、外には屢々遠征を起して版圖を擴め、内には文化を再興して壯麗なる宮殿堂祠を建築せり、之を埃及極盛の時代となす。後國勢衰頽して、エチナピヤ 人に征服せられ、次で アツシリヤ 王國に隸屬したりしが、紀元前六百六十六年頃、ナザンメチック なる者起りて アツシリヤ の羈絆を脱し、埃及を統一して都を サイス に遷せり。然れども其後國勢萎微して振はず、遂に紀元前五二五年、波斯王 カムブジア (カムビセス) ともいふ) の屬領に歸したり。

埃及人の宗教

天然の埃及に與へし影響は、埃及人の宗教心を喚起せり。埃及人は太陽を神として拜し之を ラ と稱し、其他冥界の神 オシリス 及び其女神 イシス を尊崇せり。又埃及人は靈魂の不滅を信ぜしかば、藥術を施して其屍体の腐敗を止め、之を永遠に保存せり。

埃及人の文化

埃及の建築物中著名なる者を金字塔、螺旋堂、方尖碑、石像、及び岩石を穿開して作りたる墓等となす。而して是等建築物には概ね奇異なる象形文字あり、之を ヒログリフ (神聖文字の義) と稱す。埃及人は大に學理を講じ、算術、幾何、天文、醫術に通じ、又硝子、磁器の製造、攻玉、冶金、機織、染物等の諸術に長ぜしが、其繪畫彫刻は大に宗教の箝束を受けしかば、畫工彫師は意匠を恣にするを得ず、爲めに美術の眞隨に達すること能はざり



き。

### 第二章 猶太

希伯來人は初め エウフラテス 河の上流 ウル と稱する地に住し、牧畜を業とせしが、紀元前二〇〇〇年頃、其酋長 アブラハム 部衆を率ひて メソポタミヤ に移り、後又 カナン の地に赴き、依然牧畜に従事したりき。然るに其子孫 埃及に移り大に繁殖せしが、多年埃及王の虐待を受けしかば、遂に紀元前一三二〇年 モーゼス なる者其部衆を率ひて 埃及國を去り、紅海を渡り パレスチナ の地に移住し、此に初めて一國民の体を成せり。

モーゼス の歿後 ジョシュア なる者之に代り、パレス

希伯來人  
埃及を出

士師時代

國王

チナ の大半を征服し、其部衆を十二族に分ちて、祭政一致の政府を立てたり。然れども各部族の結合強固ならず、加ふるに屢、四隣蕃族の侵寇を被りしかば、高僧と族長とを兼ねたる士師なる者神託に依りて其部族を統治し、且つ外寇を却けたり。其後内憂外患切りに起りしかば、國民の團結を強固にして外敵を防ぐの必要を感じ、遂に紀元前一〇五五年頃最後の士師 サミュエル の時王政を創設し、ソール を立て、王とせり。ソール 王は能く四隣の蕃族を征して、王政の基礎を固め、第二の王 ダボド は英邁にして外敵を討ち、國境を擴めて、エウフラテス 河に達せしめ、都を エルサレム に置き、國勢頗る隆盛を極めたり。其子 ソロモン 繼ぎて立ち、賢明にして文學、建築及び商業を奨励し、近隣諸國と交通して、一



時は盛大を極めしが、晩年王は奢侈に流れて國民の負擔を重くし、頗る怨望を招きたり。

ソロモン の歿後十二種族は、遂に紀元前九五三年に至りて二王國に分離し、北方の十族は相合して更に王を撰て、イスラエル 國を建て、南方の猶太、ベンジャミン の二族は猶ソロモン の子を奉じて猶太國を建て、二國互に相攻伐せり。後 イスラエル 國は紀元前七二一年 アッシリア 王サルギナ (サルゴン) の滅ぼす所となり、猶太國は紀元前五八六年 バビロニア 王 ネブクヅルウヅル (ネブカドネザ) の滅ぼす所となれり。

希伯來文化の影響を後世に及ぼしたる特質は、學藝、建築、彫刻等の上にあらずして、獨り其信する處の猶太教と稱する一神

イスラエル王國と猶太王國

希伯來の文化

教の上であり、其經典を舊約全書といひ、希伯來聖賢の教訓、豫言傳記、歴史及詩歌戯曲等を記述せる者にして、其文學皆宗教的ならざるはなし。

### 第三章 フォイニケ

フォイニケ は 地中海と レバノン 山脈との間に横はり、其幅二里より六里に達し、延長六十一里餘に過ぎざる一小狹地にして、地味耕作に便ならずと雖も、國民技術に長じ、製造に勉勵し、夙に航海商業を以て其名を知られたり。

此の國は シドン、チルス、アラブス、ビブルス 等の獨立せる數市より成り、各市府各世襲の君主を戴き、非常の事あるに臨んで往々相聯合し、最も有力なる者を仰で其盟主となせ

フォイニケの地勢

政体



フオイニケの衰微

り。而して紀元前一三〇〇年頃には シドン 最も勢力を有し、紀元前一〇〇〇年頃よりは チルス の勢力盛にして、専ら力を商業航海に伸べ、地中海上の主權を握れり。

紀元前八五〇年以後 フオイニケ は諸殖民地の獨立と外國の侵寇とに遭ひて其勢力大に衰頽し、紀元前六〇六年より以後は チルス を除くの外悉く バビロニヤ、波斯等の主權に服せしが、遂に紀元前三三二年 アレキサンドロス大王の チルスを降すに至りて マケドニア の屬領となれり。

通商、航海、殖民

フオイニケ は其位置極めて航海商業に便なりしかば、國人夙に地中海の沿岸及び諸島嶼と交通し、キプロス、シチリア、サルデニア等の諸島に殖民し、猶西進して ジブラルタ

製造品、文明の傳播

ルの海峡を越え、西班牙の南岸に カデル(今のカ)市を建て、更に進で英國に至り錫を採り、又亞非利加の北岸 ユチカ、カルタゴ 等に殖民し、東は陸路 バビロニヤ、アッシリヤ、亞刺比亞等に隊商を送り、又航路を紅海波斯灣に開きて印度錫崙と交通せり。

フオイニケ 人の有名なる製造品は硝子、紫色染料等にして、採鑛、冶金、織物、建築等の術も又其長ぜし所なりと雖も、特にフオイニケ 人が世界の文明に大影響を及ぼしたる功績は、通商航海に依りて知識を東西に傳播したると、言語を寫さんが爲めに聲音文字を發明したるとにあり。

#### 第四章 バビロニヤ 及び アッシリヤ



地勢

チギリス、エウフラテス 兩河の地方も又、ニルス 河  
近傍の如く極めて豊饒なるを以て、大古既に スメリアイ、  
アツカザアイ なる二人種此に土着して耕作に従事する者  
ありしが、後 シエム 派の人種侵入し來りて土人を征服し、  
遂に之と混合して、舊 バビロニア 王國を創建せり。

舊バビロニア

舊バビロニア 王國は一に カルデヤ 王國と稱す、其國  
初の事蹟明瞭ならずと雖も、紀元前二〇〇〇年頃獨立の王國  
となりて、エウフラテス 河畔に バビロン府を建設せし  
が如し。後紀元前一二五〇年頃 アツシリヤ 國勃興して勢  
力を振ふに至り、遂に其滅ぼす所となれり。

アツシリヤ

アツシリヤ は チギリス 河邊に起り、もと舊 バビロ  
ニア の殖民地なりしが、漸く強大となり、紀元前一五〇〇年

アツシリヤの盛時

頃舊 バビロニア の羈絆を脱して獨立し、後之を滅ぼせり。  
アツシリヤ は國人武を好み、加ふるに チグラトバル・エ  
ザル二世、サルギナ、シン・アキイルバ、アサツフ・アキイツ  
ザナ、アツスル・パニバル五世 の如き、英主踵を接して出で、  
イラン、アルメニヤ、フォイニケ、パレスチナ、シリア、  
埃及等を征服せしかば、紀元前七世紀の頃 アツシリヤ  
王 アサツフ・アキイツザナ の版圖は、西は ニルス 河よ  
り東は 印度河に達して頗る廣大を極めたり、之をアツシリ  
ヤ 極盛の時代とす。

アツシリヤ滅亡の原

アツシリヤ の版圖は此の如く廣大なりしと雖も、漫然小  
邦國の集合せしものに過ぎざりしかば、アツシリヤ は其  
勢力衰頹するに至り、之を壓服すること能はず、叛亂止む時無



後バビロニア

かりしが、紀元前六二五年、メヂヤ王、キヤクサレス(ウバク  
シヤトク)は、バビロン(バビロニヤ)の鎮將、ナバルウズル(ウバク  
シヤトク)と兵を合せて國都ニネエを陥れ、遂にアッシリヤを滅ぼせり。

後、バビロニアは、ナバルウズル、獨立を唱へ、バビロニアを領して王國の基礎を開き、其子、チブクヅルウズル王、埃及に勝ち、シリヤ、フォイニケを征服し、猶太國を滅ぼして其版圖を擴張し、バビロン城を再建し、學藝を奨励し、商業を振興して大に隆盛を極めしが、其子孫父祖の雄圖を繼續する者なく、國勢頓に衰頽し、遂に紀元前五三八年、ナボナジウス王の時、波斯王、クルシ(キロス  
もいふ)の滅ぼす所となれり。

バビロニア及ビ

バビロニア 人及び アッシリヤ 人は自然力を崇拜して

アッシリア人の宗教

神とし殊に天体を神視せり、而して、バビロニア、最上の神をベルといひ、アッシリヤ、最上の神をアッスルと稱す。

文化

カルデア人は、夙に文明の域に進み、最も天文に通じて精確なる曆を作れり、又建築、彫刻は其最も長ぜし所にして規模宏大なるを以て著るし。

楔形文字

カルデアの文字は楔形の符號にして、カルデア人の發明にあらず、夙に、スメリアイ人の使用せし者なるが如し。

### 第五章 波斯

波斯人及び、メヂヤ人は、裏海の南、イランの高原に住し、共に、アリア派に屬して其先世、バクトリアより移

メヂヤ人及び波斯人



住し、メジア人は西北に住み、波斯人は南部に住めり。初めは共にアッシリアに屬せしが、紀元前六四〇年メヂヤ先づ獨立して波斯を併せ、其王、キヤクサレスの時、アッシリヤを滅ぼし、チギリス左岸の地を併吞せり。然るに其子、イスチベツグ(アスチアグス)の時に至り、紀元前五五八年波斯王クルシの滅ぼす所となれり。

クルシ王

波斯王クルシはメヂアの衰微に乗じて之を滅ぼし、次でリヂア及びバビロニアを征服して一大帝國を創建し、其版圖東は多島海より西は印度河に達せり。其子カムブジヤ(カムビゼス)王位を嗣ぎ、親ら兵を率ひて埃及を征せしが、歸途シリアの地に歿し、國內大に亂れしかば、ダライアウシ(ダレイオス)なる者ハカマニッシ家の庶流よ

ダライアウシ王

り出て内亂を平定し、紀元前五二一年波斯の王位に上れり。

ダライアウシ王は都をスサに置き、其版圖を二十縣に分ちて各知事(サトラプの父といふ義)を置き、王の名を以て行政、司法及び收税の事を司らしめ、又軍路を築き、驛傳を設け、收税の法を改め、貨幣の制を定め、農商を奨励せり。ダライアウシ王の時より希臘と争端を開きしが、其子クシヤヤルシア一世(クセルクセ)大軍を率ひ希臘に進入して大に敗れ歸れり。其後波斯は内亂屢起りて國勢大に衰へ、遂にダライアウシ三世の時に至り、紀元前三三〇年マケドニヤ王アレクサンドロスの滅ぼす所となれり。

波斯の宗教

古代波斯の宗教はバクトリアの賢人ザラツストラの改革大成せる者なり、其經典をアエスタと稱し、其教旨

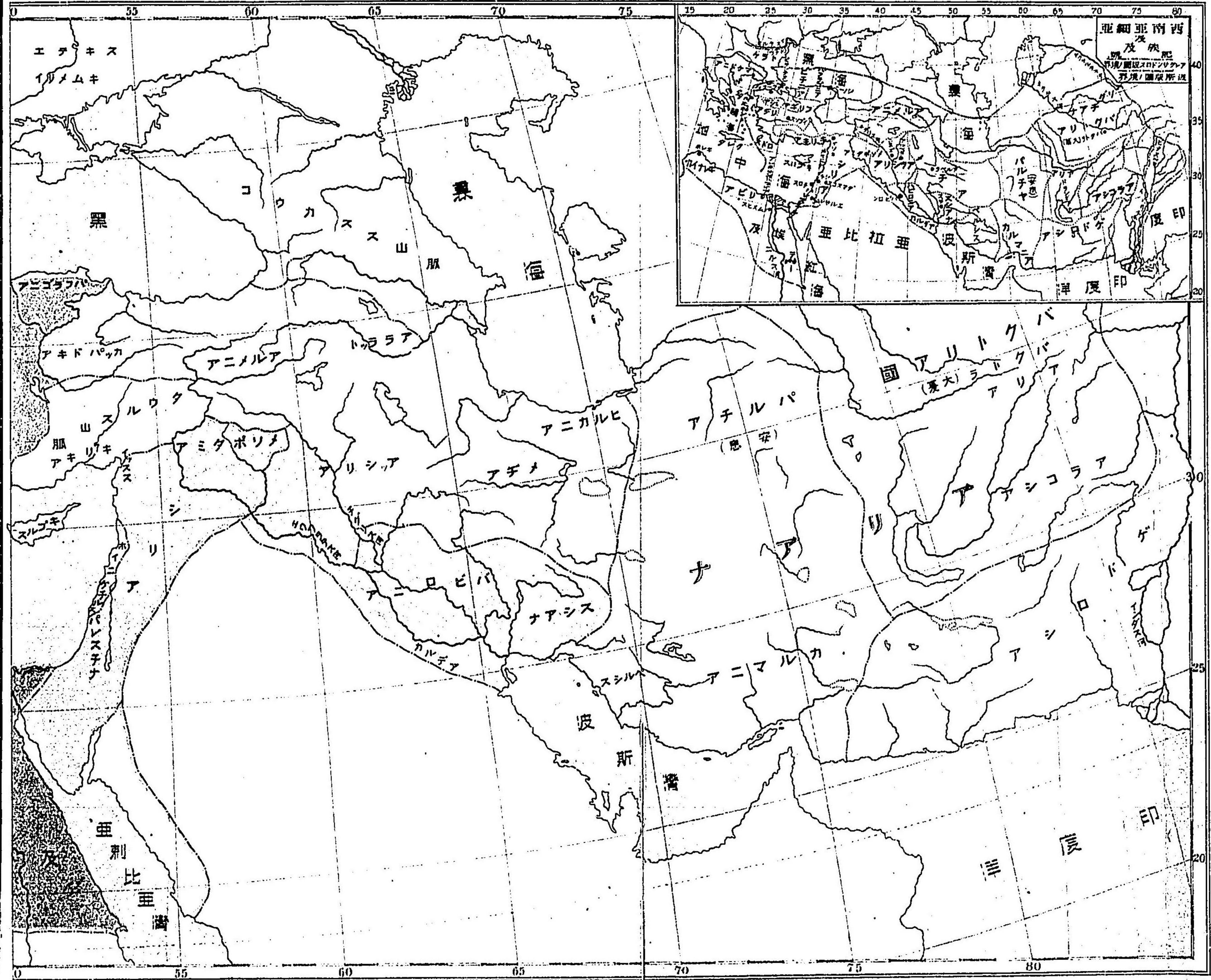


は二元主義にして、宇宙間には、オルムーズ（光明、幸福、慈愛）  
アールマン（闇黒、災禍、破壊）二神の常に相争闘するありて、人  
間の禍福は其勝敗に由り定まるとなせり。然るに後年、メヂ  
ヤより、マギー 教を傳へて、ザラツストラ 教に混じ、  
拜火の奇習を生ぜり、其僧侶を マギー と稱し常に禮拜を  
掌どり又星占をなせり。

波斯人の建築は其規模宏壯雄麗にして一種の雅致を備へ、  
古代國民の建築中特種の發達をなしたる者なれども、埃及及  
び アッシリア 二國人の影響を受けたること甚だ大なり  
なり。

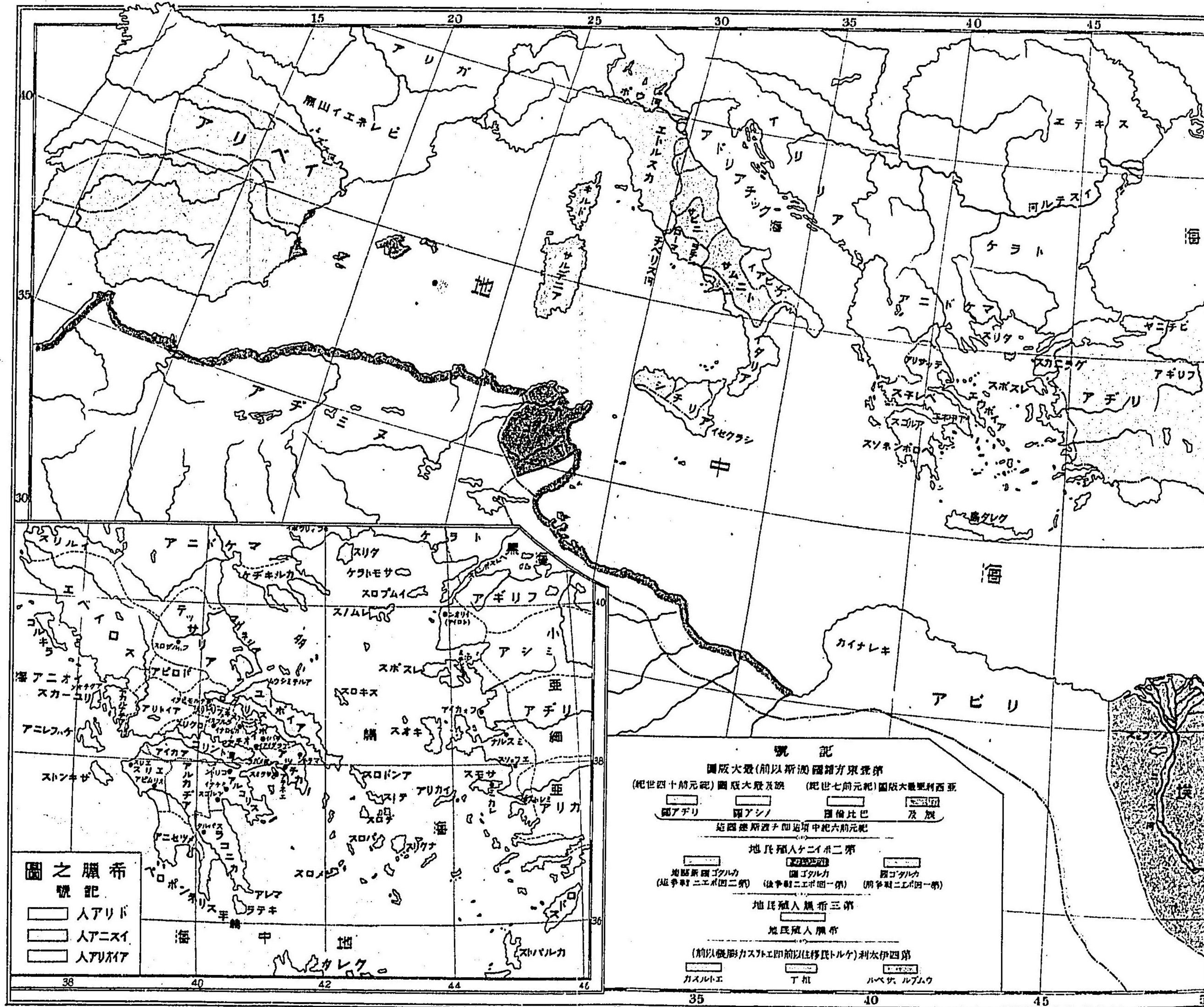


部東界世代古





古代世界西語





## 第二部 希臘

國名の起

地勢

希臘とはもと羅馬人の與へし名稱にして、希臘人は自ら  
ヘレキス と稱し其國を ヘラス と呼べり、初め羅馬人は  
以太利に最も近き海岸に住せる グライユイ 人と交はりし  
かは、遂に希臘を以て ヘレチス 全体の名稱となせりといふ。  
希臘は北は オリム波斯、カムブニイ の二山を以て歐  
州大陸に接し、南は地中海に臨み、西は イオニヤ 海に面し、  
東は多島海に濱する半島國にして、其沿岸出入多く、且つ其近  
海には無数の島嶼羅列して航海に便なるを以て、希臘人は埃  
及 フォイニケ と交通して其感化を被り夙に開明の域に  
進めり。然るに内地の形勢は全く之に反し、山嶽縱横に交叉し



土著人民  
の希臘派

て、原野其間に介在し、數多の小邦割據するに便なりしかば、早くより獨立自由の氣風を發揚せり。

希臘在來の土人を ペラスギー と稱して、アリア 派に屬し、もと小亞細亞の西北より移住し、夙に農業に従事し、且つ城市を建設せしが、其後、ヘレネス と稱する アリア 派の一民族亦小亞細亞より來り、ペラスギー 人を逐ひて其地を占領し、後分れて、イオニヤ、ドリヤ、エイオリヤ、アカイヤ の四族となれり。就中、イオニヤ 人、ドリヤ 人は最も重要なる者にして、希臘史は實に是等二民族競争の歴史といふを得べし。

第一期 鴻荒時代より波斯戰爭

に至る (太古—紀元前五〇〇年)

第一章 古代希臘の形勢

ホメロス  
の時代

希臘の正史は其端を第一回、オリムピア 祭の年即ち紀元前七七六年に發せり、正史以前の傳説は詩聖、ホメロスの二大詩篇、イリアード、オデシー 中に存し、荒唐無稽の事蹟に事實を混同して能く太古の状態を描寫せり。史家此の時代を、ホメロス 時代と云ひ、又勇士の事蹟を多く記するを以て、勇士時代とも稱す。而して其社會の状態は許多の獨立せる都府ありて、各王を載き、王は最高の裁判官及び僧侶にして、戦時は元帥たり、其下には貴族の評議會と公民の集會とありて、國王を輔け、一家の權勢は族長之を握り、婦人は好位地を占め、多妻の風なく、奴隸は公行せり。



王政廢れ  
共和政  
体起る

希臘の正史其端緒を發するの際王政漸次に廢れて共和政  
体之に代はりしが獨り スバルタ のみは依然王政を保持  
して二王を置けり共和政体には都府の舊家の子孫のみ政柄  
を握れる貴族政治と如何なる公民も公職に就き且つ公會に  
列席して投票するを得べき民治の二者ありき其他僭主政治  
なる者も又行はれたり僭主とは貴族平民の兩者相軋する  
の機に乗じ名を市民の保護に托して巧に民心を収攬し終に  
主權を畧取せし者の謂にして後世の所謂虐君にはあらず。

希臘人結  
合の五大  
要素

以上の如く希臘は許多の邦國に分れ政治上の統一を欲し  
しと雖も其人種言語風俗宗教國祭の同一なるありて大に國  
民を結合せり殊に デルフオイ 市に鎮座せる アポロン  
の神殿を守護する爲め、半年毎に開かれたる アンフクチオ

ドリヤ人  
の移轉

ニア 會議と希臘四大國祭の一にして四年毎に舉行せられ  
たる オリムピヤ 競技とは國民の結合に與りて大に力あ  
りき。

ドリヤ 人は初め希臘の北部に土着したりしが後南移し  
て ペロポネソス の地に侵入せり是に於て ペロンポ  
ネソス の東南に住せし、アカイヤ 人 及び エイオリ  
ヤ 人は其北岸に遁れて イオニヤ 人を逐ひ、イオニヤ  
人は、アチカ に避けて中部希臘及び多島海の諸島に蕃殖  
せり。

希臘殖民  
地

希臘人が小亞細亞の沿岸及び其近海諸島に、エイオリヤ、  
イオニヤ、ドリヤ の三殖民地を建設したるは、此騷擾の際  
なりとす。其他希臘人の殖民地は、南方は埃及の キレキ、東



方は黒海沿岸のピサントウム、西方はシチリヤのシラクセー、以太利のチアポリス及びタレンツム、佛蘭西のマツシリヤ(今のマルセイユ)等の遠きに及べり。

### 第二章 スバルタ及雅典の勃興

初めドリヤ人のペロポンネソスに移住せしや、アルゴリス、メッセニヤ、ラコニカの三國を建設せり。ラコニカ國の首府をスバルタといひ賢人リコウルゴス(紀元前八五〇年頃)の新法を實施して獨り強大に赴き、他の二國を凌駕せり。リコウルゴス立法の旨意は、武斷勇壯の國民を養成し、強大なる國家を生出するにあり。故に男子生れて體質孱弱なる者は之を殺し、強健なる者は七歳に至れば父母

スバルタ  
府とリル  
ウゴス  
の制度

の膝下より離し、二十歳に至る迄政府之が教育の任に當りて武技を授け、長して六十歳に至る迄を兵役務服の年間とし、常に營舎に起臥し、共同の食卓に就かしむ。婦人の如きも又嚴重なる體育を施したりき。

スバルタ  
の政体

スバルタの政体は一種の特色を帯び、上は二人の國王ありて一は兵士を指揮し、一は國祭を司どれり。其下には元老院スバルタ及び公民の集會あり、公民の集會は毎歳五人の監察官エラトラスを撰出して政治の實權を執行せしめしかば、王權大に制限せられ、名は君主專制なるも、其實寡人的共和政治なりき。

スバルタはリコウルゴスの新法に由りて強盛に赴きしと雖も、文學、美術、商業等を擯斥せしかば、後世希臘文化の發生に影響せし所絶えて見るを得ざりき。



雅典の政体

雅典は希臘の東南隅に位せるアチカ州の一市にして建國の初めより王政行はれしが、紀元前一〇五〇年頃ドリヤ人の入寇に遭ひ、雅典の王コドロス防戦して陣歿せし以後復又王を置かず、貴族等相謀りて王族中よりアルコン即ち統領一人を撰出し、之に政權を委任し、終身在職せしめたりき、然るに後年其任期を十年に限り、後又改めて一年となし、九人のアルコンを貴族中より撰出するに及び、雅典の政体は遂に變じて貴族政治となれり。

ドラコンの法典

當時雅典人は成文律を有せざりしかば、紀元前六二四年頃貴族等アルコン、ドラコンをして法典を編纂せしめしが、其法律極めて峻嚴なりしかば、平民の反激甚しく、ドラコン遂に遁逃せり。

ソロンの新制

紀元前五九四年ソロンのアルコンに撰出るゝや、ドラコンの嚴法を全廢し、新制を頒布して負債の爲めに平民を奴隸となすを禁じ、且つ新錢を鑄造して平民の負債償却に便益を與へ、又人民を其財産に従ひて(第一)ペンタクシモメナムノイ、(第二)ヘツペイス、(第三)ツェンギタイ、(第四)テナスの四級に分ち、上院プロボロレ、下院エツレシヤ及び元老院アレクサゴス等を設立し、下院には各級の人を列席せしめて第一級より毎歳九人のアルコンを撰出するの權を與へ、上院議員には第一、第二、第三の各級より毎歳四百人を選擧し、元老院議員には嘗てアルコンたりし人を以て之に任ずる事とせり。

ソロン新制の結果

ソロン新制の旨意は、唯に貴族平民兩者の軋轢を調停するにありしかば、其結果は猶貴族にのみ過多の利益を與ふる



ペシスト  
ラテスの  
治績

に至り、平民の不平を治する能はず、遂に兩黨の軋轢を生ぜしが、ペシストラテスなる者此機に乗じて平民黨の首領となり、巧に民心を収攬して勝利を得、紀元前五六〇年雅典の僭主となれり。ペシストラテスは猶ソロンソロンの憲法を襲用し、寛大なる政治を施し、商業、建築を奨励して、治績甚だ多かりしが、其子ヒッピアスヒッピアスに至り、人民を虐遇せしかば、紀元前五一〇年國外に放逐せられたり。紀元前五〇九年クレイステテスクレイステテスの政權を握るに及び、ソロンソロンの法律を改良執行し、良民を十族デカに分ち、各族より毎歳五十人の代議士プロクシイを撰出し、各族をして順次之か議長たらしめ、又是等の十族中より毎歳十人の軍將ストラテゲイを撰擧し、軍事を專にせしめて、アルコンアルコンの權を殺き、又オストラキズモスオストラキズモスとて、無記名投票を以て治

クレイス  
テネスの  
改革

安を妨害するの嫌疑を受けたる者を、十年間國外に追放するの法を設けたりき。此法の主旨たる僭主の輩出を防ぐにありしと雖も、後には屢之を濫用して其弊害甚だ多かりき。

### 第二期 波斯戦争よりマケドニア盟主

時代に至る

(紀元前五〇〇年—同三三八年)

#### 第一章 波斯戦争

初め波斯王 クルシクルシの リヂヤリヂヤ 王國及び其領地を征

服せしや、小亞細亞の希臘殖民地も亦從來 リヂヤリヂヤ 王國に隸屬せしかば、勢ひ波斯に隸屬するに至れり。

然るに希臘殖民地は常に波斯の羈絆を脱せむと欲し、遂に

波斯戦争  
の原因



第一第二波斯戦争

紀元前五〇〇年反亂を企しに雅典は軍艦を送りて之を援助せしかば、波斯王　ダライアヴシ　大に怒り、兵を遣して希臘を侵撃せしめたり、之を波斯戦争の原因となす。

紀元前四九三年　ダライアヴシ　は、其女婿　マルドニオス　に海陸の大兵を授け、希臘を征せしめしが、其海軍は颶風に遇ひて覆没し、陸軍又　トラケ　人の破る所となり、希臘の本土に達せずして歸れり。是に於て　ダライアヴシ　意を決し、紀元前四九〇年其將　アルタフェルチス　に大兵を授け、アチカ　の東岸　マラトン　の平野に上陸せしめしかば、雅典の將　ミリチアデス　僅かに自國の兵一萬及び　プラタイエイ　の援兵一千人を率ひて之を撃破せり。然るに波斯人は雅典の虚に乗して、之を襲はむとせしが、又　ミリチアデ

第三波斯戦争

テミストクレスとアリスタイデス

スの破る所となり、再び本國に逃れ去れり。

此の戦勝後雅典に　テミストクレス　及び　アリスタイデス　の兩雄輩出し、波斯人の再舉を慮りて防禦の策を講ぜり。然るに　アリスタイデス　は　テミストクレス　と意見を異にし、之に反對せしかば、　テミストクレス　は之を黜け、國人に勸めて海軍を擴張せり。果して紀元前四八〇年に至り、ダライアヴシ　の子　クシヤアルシア　父の志を紹ぎ、海陸の大兵を　ヘルスポント　に集め、自ら之に將として　トラケ、マケドニヤ　等の地を席捲し、疾風の如く希臘の内地に侵入せしかば、雅典、スパルタ　其他の數市相聯合して之に當らんことを盟ひ、　スパルタ　を盟主となせり。是に於て紀元前四八〇年七月　スパルタ　王　レオニダス　其國人三



テルモビ  
レイの戦

サラミスの  
戦  
アラミスの  
戦  
エイ及び  
ミカレの  
戦

百人及び同盟兵數千人に將として、テルモビレイの峽路を扼し、敵を支ふること數日なりしが、戰遂に利あらずしてスバルタの將士悉く戰歿し、波斯人勝に乗じ長驅して雅典に薄り、火を放て之を焼けり。然るに、テミストクレスはスバルタの將、エウリピアデスと共に希臘の海軍を帥ひ、波斯の戰艦をサラミス灣に襲ひて之を粉碎し、クシヤルシアをして倉皇軍を委して逃れ歸らしめたり。紀元前四八〇年九月十日、翌年九月二十五日、スバルタの大將パウサニアスは三十萬の波斯兵を、プラタイエイに破りて之を殲し、同日雅典の艦隊は、ミカレに到りて大に波斯の海軍を撃破せり。

### 第一章 雅典の隆盛 ペリクレス時代

デロス同  
盟

雅典は戰勝後直ちに其都城を再建し、紀元前四七七年には沿海の諸國を糾合して、デロスの同盟を組織し、各戰艦資金を醸して同盟海軍を設け、自ら其盟主に推されたり。

ペリクレス  
時代

紀元前四七一年、テミストクレス市民に逐はれしかば、アリスタイデス之に代りて雅典の政治を改革し、貴賤の懸隔を廢して市民に等しく政權を與へたり。次で大政治家ペリクレス執政に擧げられ、民權を擴張し、海軍を強盛にし、壯嚴なる堂宇を建築し、文學技術を獎勵し、商業貿易を盛にせしかば、後世歐洲文明の淵源たる雅典の文華は燦然として一時に興發せり。後世之をペリスレス時代(紀元前四七九年より



雅典の専横

同四二九年に至ると稱す。然れども雅典の専横は同盟諸國の怨恨を買ひて聯合の基礎を弱めしのみならず、雅典の隆盛は遂に希臘諸邦の嫉妬を招くに至れり。

第三章

ペロポネオス戦争  
スパルタ、テーベの覇

(紀元前四三一年—同四〇四年)

ペロポネオス戦争

紀元前四三一年希臘に内乱起る、之をペロポネオス戦争といふ。之れ其原因希臘諸邦殊にスパルタが雅典の隆盛を嫉みしと、雅典がコリキラを援けてコリントを伐ち、コリントを援へてスパルタに請ひしとに由れり。スパルタ直ちに開戦を宣言し、ペロポネオスの諸國

雅典の衰微

と同盟して雅典及び其同盟國に抗し、戦亂延ひて二十七年の久しきに亘れり。紀元前四二一年一時平和の局を結びしが、紀元前四一五年雅典がアルキビアデスの策を用ひてシチリアを征するに當り、スパルタのシチリアに應援するに及びて、内亂再び起れり。此の時に當りスパルタは軍費の支給を波斯王に仰ぎて勢力大に加はりしが、雅典は之に反して其同盟國續々離反し、國內には黨争起りて國運日に傾きしかば、連戦皆破れ、遂に紀元前四〇四年四月スパルタの將リサンドロスに降るに至れり。是に於てペロポネオス戦争終局を告ぐ。此の時雅典は共和政治を廢して寡頭政治となし、執政三十人を置けり、之を三十暴主といふ。然るに八ヶ月の後人民暴主に抗して之を逐ひ、共和政を再設



スパルタの争

エバメイノンダス

せしが、到底舊時の隆盛に復すること能はざりき。  
 雅典衰微の後、スパルタは希臘の最強國となり、爾來三十三年間其覇權を掌握し、勢を恃みて專横なりしかは、諸國大に憤激し、雅典先づ背き、ユリント及びテーベレ之を扶け、波斯も又之に應援し、後スパルタを援ひ、連戰數年に亘りしが、紀元前三八七年至りて、アンタルキダスの和議を締結し、小亞細亞の希臘殖民地は波斯の有に歸せり。  
 此の時に當りて、スパルタは、國威昔日の如くならずと雖も、平和の機に乗じて、テーベレの貴族黨と通じ、不意に起りて其城砦を占有せり(紀元前三八三年)後、テーベレの豪傑エバメイノンダス及びペロピダスの二人謀りて之を恢復し、次で紀元前三七一年エバメイノンダス、スパ

ルタ人をレウクトラに破りしかは、テーベレの勢力一時に勃興して希臘の最強國となれり。然るに紀元前三七一年エバメイノンダス兵を率ひて、ペロポンネソスに入り、スパルタの軍をマンチチアに破り、敵の投槍に中りて戰歿せるに及び、テーベレの覇權一時に地に墮ちたり。而して希臘列國も又多年の戰亂に疲れて國力衰耗せしかは、終にマケドニヤをして威を列國の上に振はしむるに至れり。

### 第三期 マケドニヤ盟主時代

#### 第一章 ヒリッポス王の覇圖

マケドニヤは希臘の北東に位し、其住民は希臘人の同族

マケドニアの形勢



なりしが、勇敢にして畋獵を好み、其風俗粗野なりしかば、希臘人は、之を蕃夷と稱して列國の中に加へざりき、然るに歴代の諸王力を盡して希臘の文學技術を輸入し、漸く野蕃の境遇を脱せしめたり。

ヒリッポス王

紀元前三五九年　ヒリッポス　王の即位するや、當時希臘諸國の衰微に乗じて其霸威を振はむと欲し、先づ其疆土を擴め、強剛なる軍隊を組織して其機を待てり。會、フォキス人デルフォイに於けるアポロン　神殿の附屬地を掠奪せしかば、希臘諸國は神事同盟を結びて之を責罰せんとするを見、ヒリッポスは機至れりとなし、同盟に加入して　フォキスを伐ち、遂に希臘列國の中に加はりたり。然るに當時雅典の名士に　デモステテス　なる大雄辯家あり、ヒリッポ

スの野心を看破して國人を警戒せしかば、雅典は　テーベと同盟して、ヒリッポスに抗せしが、ケイロチイアに戦て二國の軍大に敗れ、(紀元前三三八年)　ヒリッポスの威希臘全土に振へり。次で　ヒリッポスは列國大會を　コリントに開きて波斯征伐の議を決し、自ら將として出征せんとせしが、軍備半ばにして其臣下の爲めに弑せられたり(紀元前三三六年)。

第二章　アレクサンドロス大王と

其遠征

アレクサンドロス　は年甫めて二十にして其父　ヒリッポスの後を稟け、先づ　テーベの反亂を平け、次で父の

アレクサンドロスの遠征



アレクサ  
ンドロス  
の宏圖

遺志を紹ぎ、紀元前三三四年僅かに歩兵三萬、騎兵四千五百を率ひて、ヘレスポントスの海峡を渡り、グラニコス及びイッソに戦て大に波斯軍を破り、南に轉じてフォイニケを征し、更に埃及に入りてアレクサンドレイヤ市を建設し、再び東方に轉じて波斯の大軍をアルベラに破り、波斯王ダライアウシ三世を追究せしが、波斯王は其下の弒する所となれり(紀元前三三一年)。是に於てアレクサンドロスは波斯帝國を悉く征服し、更に進んで印度に侵入し、ヒダスベス河畔に至りしが、兵士西歸を思ひ、更に進むを願はざりしかば、海陸二路に分ちて軍を旋し、其將ネアルクスを以て海路エウフラテス河に向はしめ、自ら陸軍を率ひて紀元前三二四年波斯に還り、次でバビロンに入れり。

遠征の結  
果

アレクサ  
ンドロス  
大帝國の  
分裂

アレクサンドロスはバビロンに都し、其征服せし諸國を合して一大帝國を建設せんと欲せしかば、勉めて波斯の民心を収攬し、自ら波斯先王の女を容れて后となし、又其將士に説きて波斯の婦女を娶らしめたり。アレクサンドロスは亞拉比亞を征せんと欲して未だバビロンを發せず、紀元前三二三年六月熱を病んで歿せしかば、王の宏圖全く完成せざりしと雖も、其遠征の結果は亞細亞の文物を希臘に傳へ、希臘の言語、技術、習慣等を亞細亞に播種し、歐亞二洲に跨りて廣大なるヘレチス世界を作生し、又印度に通ずる航路を再び開きて、歐亞の商業に大影響を與へたりき。

アレクサンドロスの歿後、諸將内に相争ひ、終に紀元前三



セレウコ  
ス家

プロトレ  
マ  
イオス家

希臘の末  
路

○一年 イブスス の決戦に由り領土を四大國に分割し  
 プロトレマイオス、リシマクス、セレウコス、カツサンデル  
 の四將各王を稱して之に臨めり。就中最も大なる者は、ゼ  
 レウコス 家にして シリヤ 以東の地を領有し、後 リシ  
 マクス 家を滅して小亞細亞を併呑し、一時は其版圖多島海  
 より印度に連亘せしが、久しからずして シリヤ の一王國  
 に縮少せり。プロトレマイオス 家は 埃及、バレスチナ、  
 フォイニケ 並に キプロス 島を領有して、アレ  
 クサンドレイア を首府となし、大に希臘の文學技術を獎勵  
 し、有名なる大學と大圖書館とを建設して、當時文明の中心た  
 りき。此の時希臘諸國は、マケドニア と共に カツサ  
 ンデル に歸したりしが、後其羈絆を脱せんとせしかば、戦亂



欠

MISSING



古代以太利の住民は エトラスカン 人、 ガリア 人及び  
以太利人等の別ありしと雖も、皆 アリヤ 派に屬して希臘  
人と其祖先を同ふせり。エトラスカン 人は アルノ、 チベ  
リス 兩河の中間に住して、當時既に建築其他の技術に長じ。  
ガリア 人は北部以太利を占領し、以太利人は中部以太利を  
有ちて二大部に分れ、西南の者を拉丁人と稱し、東北の者を  
オスカン 人と稱せり、オスカン 人更に分れて サムニ  
ト、 サピン 等の諸族をなせり。其他希臘人の南部以太利及  
び シチリア 島に住せざる者ありき。

第一期 王政時代(紀元前七五三年—  
同五一〇年)



羅馬の階級

羅馬は初め拉丁人がエトラスカン人の侵襲に備ふる爲め、アルパロンガ市の外城として建設せる處なりしが、其地勢互市に便なるを以て、拉丁人及びオスカン人の一派なるサピンの人の之に移住する者多く、住民漸次増殖して終に一都邑をなすに至りしなり。

人民の階級

上古羅馬の人民は、貴族平民の二階級に分れ、貴族はパトリキイと稱し、羅馬の舊族即ち戦勝者の子孫にして、元老院及び姓會コンチリヤと稱する議會を組織し、法律の制定、宣戰、媾和、國王撰舉等の諸大權を有せり。平民はプレベスと稱し、征服せられたる各都市の人民及び他邦より羅馬に移住せる者より成り、私權を有すれども一切參政權を有せざりき。

七王の傳説

傳説に據れば、羅馬の建國は紀元前七五三年にあり、王政も

此の年を以て始まり、紀元前五〇九年に至る迄繼續し、其間七王の代替あり。初代の王ロミュルス以下諸王の事蹟信を措くに足らずと雖も、初めは拉丁人、サピン人交互に王を出せしが、其後エトラスカン人羅馬を征じ、其酋長立て王となりしが如し、加之最後の三王に就き、史上要用なる傳説あり。第五代の王タルクイニウス、プリスクスは、大に羅馬市の規模を擴め、第六代の王セルギウス・タリウスは古制を改め、貴族平民を問はず、財産に従ひて人民を五級に分ち、總て土地を有する者は兵役納税の義務ありとし、兩族を包括せる民會コンチリヤを起して、平民に參政の權を與へ、第七代の王タルクイニウス・スーペルブスは、殘忍暴戾を極めしかば、國人怒りて之を放逐し、終に王政を廢せりといふ。



第二期 共和時代(紀元前五一〇年—

同三一年)

第一章 貴族と平民との争權

羅馬人は王政を廢して共和政治となし、新に執政二人を貴族中より撰舉して行政を司らしめ、其任期を一年となせり。元老院、姓會、民會の三者は之を存し、民會には執政を撰舉するの權と新法の裁否を議するの權とを與へ、元老院議員は第一階級より執政の指名に由りて之を舉る事とし、國家危急の際には執政の中より總頭一人を撰みて之に獨裁權を與へ、其任期を六ヶ月に限れり。

當時貴族は猶政權を握り、又公田借耕の權を占有して私利

執政と總頭

護民官と平民議會

を營めるに反し、平民は參政權を有すれども、官吏及び僧侶の職に就くを得ず、屢軍役に服し、重税を賦課せられて、負債の爲め貴族の奴隸となる者多かりしかば、平民其艱苦に堪えず、終に紀元前四九四年相携へて羅馬府を去り、近傍の聖山に據り、別に新都を開設せんとせり。是に於て貴族大に驚き、負債に關する舊制を廢し、且つ二人の護民官を置き、之を平民中より撰舉すべきを約して平民を羅馬に歸らしめたり、而して護民官は其身體神聖にして犯すを得ず、元老院の議決にして平民に不利なる者あれば之を禁止するの權を有せり、後護民官を増加して五人となし、後又十人に増員せり。是に於て護民官を撰舉する爲め平民より組織せる平民議會起れり。然れども貴族平民の軋轢は依然として繼續せしかば、平民

十二板法制定



軍隊長と  
監督官

は成文法律を設けて自ら保護せんと欲し、終に紀元前四五一年新に十人の委員を擧げ、十二板法を制定せしめたり。十二板法制定後、法典編纂委員等猶其任を解かず、頗る壓制を極めしかば、紀元前四四九年人民峰起して之を放逐し、翌年新に法令を發して、護民會の權を姓會の權と同一ならしめ、且つ民選護民官の神聖にして犯すべからざることを定め、次で紀元前四四五年に至り、貴族平民の結婚を許可せり。其後平民は猶進で執政をも自己の階級より撰擧せんとし、貴族の反對する所なりしが、終に紀元前四四四年に至り、兩族互に一步を譲りて執政を廢し、新に六人の軍隊長を置き、行政を司とらしめ、兩族中より之を任命するを得る事とし、同時に監督官二人を置き、之を貴族中より撰出して、戶籍、財産、租税の監督及び公

リキニウ  
スの三大  
策

衆の德義を檢察せしめたり。而して初めて平民より軍隊長を選出せしは紀元前四〇〇年のことなりき。平民は猶其權利を伸張せんと欲し、紀元前三七六年リキニウスの護民官となるや、三大策を提出せり。其要旨は(一)平民の負債は既に支拂ひたる利子を元金より扣除し、殘額は利子を附せず、三ヶ年賦を以て返済すべし(二)公田の借耕は何人も公田五百デニケラ(一デニケラは二段歩餘)以上を超過す可らず(三)軍隊長を廢して執政を復し、内一人は必ず平民中より撰出すべしと。貴族は此要求を斥くる能はず、終に紀元前三六七年之を承認し、翌年ルキウス・セクスチウスを平民より執政に選み、同時に庶民の僮侶となるを許すに至り、百數十年間繼續せし貴族平民の爭權漸く靜穩に歸するを得たり。



以太利内地  
の統一の  
計畵

### 第二章 以太利内地征服時代

共和政治の初めに當りて、羅馬は屢、近隣の諸部落と戦ひ、又ガリア人の侵寇を受けて困厄に陥りしことありしが、貴族平民の争權漸く終りを告げ、内政整頓して國力増進するに至り、以太利内地の統一を謀りて屢、ガリア人を撃破し、拉丁諸市の反を平け、エトラスカン人を征し、又南の方サムニト人と争端を開けり。

第一 サムニト 戦争は紀元前三四三年より三四一年に至る迄繼續して互に勝敗ありしが、拉丁の諸市羅馬に背きしかば、羅馬はサムニトと和し、紀元前三三八年之を征服したり。次で 第二及第三 サムニト 戦争起り、終に紀元前三

サムニト  
戦争

希臘羅馬  
の衝突

九〇年 サムニト 人大に敗れ、南部以太利の希臘殖民市タラス 即ち タレンツム(今のタラント)を除くの外、以太利全土悉く羅馬の有に歸せり。

次で羅馬人は タレンツム の無禮を名とし、紀元前二八二年之に向て戦を宣せしかば、 タレンツム は希臘の エペイロス 王 ビルロスの援兵を得て羅馬と戦へり。是に於て羅馬人は カルタゴ と同盟して之に當り、紀元前二七五年大に之を破りしかば、 ビルロス 逃れて本國に歸り、 タレンツム 力屈して羅馬に降服し、(紀元前二七二年)以太利全部悉く羅馬の版圖に歸せり。

羅馬は以太利を統一して其人民を羅馬人、拉丁人、以太利人の三階級に分ち、羅馬人自ら以太利全部の主權と宣戰媾和、外

羅馬人、  
拉丁人、  
以太利の  
別



交、鑄錢等の諸權とを握り、拉丁人には自治權を與へ、且つ容易に羅馬人となり、其權利を有することを得せしめ、以太利人には唯自治權を與へたり。

### 第三章 外國征服時代

羅馬は以太利を統一して兵力遽かに加はり、漸く覇圖を海外に及ぼさむとするの時に當り、亞非利加北岸の強大なる海軍國、カルタゴとシチリア島事件に關して衝突し、終に戰端を開くに至れり、之をポエニ戦争といふ。カルタゴは傳説に據れば、もとフォイニケの都府、チルスの王女、ザドオの建設に係かり、航海通商を以て國是となし、地中海の沿岸及び其島嶼に殖民し、紀元前二六四年の頃に

カルタゴ

には、其版圖東は埃及以西の海岸より西は西班牙の海岸に亘り、シチリア、ユルシカ、サルヂニアに其領地を有し、既に屢、希臘人とシチリア島に於て衝突したりき。

ポエニ戦争

第一、ポエニ戦争は、紀元前二六四年より二四一年に至る迄繼續し、羅馬はシラクセイ王、ヒエロスと同盟し、又新艦隊を編制して、カルタゴ軍を破りて和を結び、シチリア島を割讓せしめたり。カルタゴ人憤慨に堪へず、國力を養成して之に報ひんと欲し、紀元前三三六年、ハミルカルをして兵を率ひて、ヒスパニア(西班牙)を攻畧せしめ、異日羅馬に侵入すべき根據となさしめたり。然るに羅馬は其強大に赴くを嫉み、口實を設けて之を伐たんとせしかば、終に紀元前二一八年第二、ポエニ戦争起るに至れり。是に於てか、ハ

ハミルカル



ハンニバル  
とスキピオ

ミルカルの子ハンニバルは、其弟ハスドルバルを留めて、西班牙を鎮せしめ、自ら兵に將としてピレネイ山を踰へ、南部ガリアに入り、氷雪を冒してアルプス山を踰へ、北部以太利に侵入してガリア人の歓迎を受け、以太利諸州を席捲して羅馬に薄りしかば、以太利諸市の羅馬に背く者多く、羅馬は内憂外患交起りて其滅亡旦夕に逼れり。然るに羅馬の將軍にスキピオなる者あり、兵を率ひて西班牙に赴き、ハスドルバルを破りて、西班牙を征定し、次で亞非利加に航してカルタゴを衝きしかば、カルタゴ人大に恐れて、ハンニバルを召還せり。是に於て紀元前二〇二年、スキピオ、ハンニバルの軍とザマに戦て之を破り、翌年和議を媾じ、カルタゴをして、西班牙、サル

羅馬とマ  
ケドニアの  
衝突

ゲニア、ユルシカを羅馬に讓與し、又五十年間歳幣を貢することとを約せしめたり。

羅馬はカルタゴと和したる後、ハンニバルに應じたる以太利の諸市を罰し、又ガリア人を征し、更に兵を東方に出して、曩にハンニバルに應じたるマケドニア王ヒリッポス五世を伐ち、紀元前一九七年之をキノスケフハレイに破り、ヒリッポスをして希臘諸市の獨立を認可せしめ、且つマケドニアを羅馬配下の同盟國たらしめたり、次で羅馬はシリヤ王安チオコス三世が小亞細亞を攻畧し、勢に乗じて希臘に侵入し來りしを迎へ撃て、大に之を破り、タウロス山以西の地を割讓せしめて和を媾せり。後マケドニアは紀元前一四八年を以て、希臘諸



カルタゴの滅亡

州は紀元前一四六年を以て共に羅馬の屬邦となれり。  
羅馬はカルタゴの勢力を恢復するを恐れ、紀元前一四九年終りに口實を設けて之を討じ、紀元前一四六年に至りて全く之を滅ぼし、其地を収めて屬邦となせり。

外征の結果

羅馬が諸國を征服して、其版圖を擴張したるの結果、希臘の優等なる文華を輸入し、羅馬人は之を學習して、拉丁文學の萌芽を發せりと雖も、四方の屬地より羅馬に注入し來れる財寶は、剛勇質朴の羅馬人をして安逸奢侈に流れしめ、道德敗壞して、昔日の士氣を全く耗盡せり。

内亂の原因

貴族平民の争權漸く終りを告げ、其區別消滅して新に富者、貧者の二階級を生じ、貧富の懸隔甚しく、富者は貧者を凌駕し、貧者は富者の專横を惡み、互に相軋轢して終に内亂を生ずるに至れり。

貧富の懸隔

グラックス兄弟

當時富者は廣大なる土地を兼并し、盛に奴隸を使役して良民を用ひざりしかば、貧者は其職を得ず、投票を賣りて僅かに其口を糊せり。チベリウス・センプロニウス・グラックスなる者あり、新制を設けて貧民の困窮を救濟せんと欲し、紀元前一三三年其選はれて護民官となりしや、直に土地所有の制限を設け、之に超ゆる者は皆収めて貧民に分配せんとせしかば、

#### 第四章 内亂時代



富民は力を極めて之に抗し、終に兵力を以てグラックス及び其黨與を襲ひて之を亂殺せり。後紀元前一二三年に至り、其弟カイウスカイクスの護民官に選はるゝや、兄の遺志を紹きて貧民の強盛を圖り、以太利人に羅馬の市民權を與へんとせしが、又富民黨の襲ふ所となりて自殺せり。

兩グラックスの死後、貧富兩黨の軋轢益、激烈を加へ、貧民はマリウスを仰ぎて其巨魁となし、富民はスラを推して其首領となせり。彼等が此の如く各派の領袖に舉げられたるは、マリウスが嘗てジユグルタと戰て之を生擒し、又ガリア人を援け、キンブリ人及びチュウトン人を破りて威名を博せると、スラが以太利諸市の羅馬に叛きて起したる、所謂社會戰爭ソシヤル・ワー(紀元前九〇年)を平定して偉勳を立てしとに由れり。

マリウスとスラ

紀元前八八年小亞細亞のポントス王ミトリダテス六世の亞細亞並に希臘を併呑せんことを企て、小亞細亞在住の羅馬人を殺戮せしや、マリウス、スラ互に征軍に將たらんことを争ひしが、スラ終にマリウスを逐ひ、兵を率ひて亞細亞に進軍せり。是に於てマリウス其虚に乗じて羅馬を陥れ、其敵人を屠殺して、自ら執政と稱せしが、僅かに十四日にして死し、其黨キンナ獨り暴威を振へり。スラ之を聞き、遽にミトリダテスと和して羅馬に歸り、大にマリウスの黨を殺戮し、自ら終身の總頭ソルダナとなり、二年にして其職を辭し、紀元前七八年病を以て死せり。此の如く、大權一人の掌裡に歸するの結果は、實に羅馬共和政顛覆の大起因となれり。

共和政顛覆の起因



ポンペイウス

スラの死後、其部將 クチイウス・ポンペイウス なる者 マ  
 リウス の殘黨を亞非利加及び西班牙に伐て之を平け、歸り  
 て劔優グラウチウスの反亂を鎮定し、又地中海の海賊を掃蕩して殊功を立  
 て、次で ミトリダテス を討じ、 ポントス アルメニア  
 を征服し、 シリア を屬邦となし、 パレスチナを附庸國アサシヤと  
 なせり。然るに ポンベウス 征東の間、 スラ の黨 カチ  
 リン なる者反逆を企てしが、執政 キケロ の發く所とな  
 り、遁走して兵を擧げ、其黨與と共に敗死せり。

第一三頭政治

キケロ

ポンペイウス の羅馬に還るや元老院の己に對する措置  
 を憤り、俄に翻て平民黨に入り、其首領 カイウス・ユリウ  
 ス・ケーザル と深く相結托し、更に富人 クラッスス に  
 交はり、三人相聯合して紀元前六〇年第一回の三頭政治トリムヴィラトを形

成せり。

ケーザル、ガリアに赴任す

紀元前五九年 ケーザル 選ばれて執政となり、翌年 ガ  
 リアの太守に任ぜられて任に赴き、勇猛なる ケルト 人  
 アクイタニア 人及び ゲルマニー 人等を伐ち、前後十年間  
 にして悉く之を征服し、現今の佛蘭西、白耳義、獨逸の西南部に  
 當れる地を平定し、又遠く プリタニア に涉り、其大半を征服  
 して羅馬の版圖となせり。ケーザル の遠征中、 クラッス  
 ス も又軍功を樹てんと欲し、 ハルチア 國(安息)を攻めし  
 が、敗れて戦歿し、 ポンペイウス 獨り羅馬に留まりて主權  
 を掌握せり。然るに ポンペイウス は ケーザル の功業  
 を猜み、之と交を絶ち、再び貴族黨と結托して、ケーザル を  
 排斥せんとせしかば、ケーザル 意を決して、紀元前四九年

ポンペイウス、ケイザルと絶つ



ポンペイの死

一月兵を率ひ南下してルビコ河を渡り急行して羅馬に近けり。ポンペイウス未だ兵を聚むるに及はず周章希臘に走りしかば、ケーザル六十日にして以太利全土を征服し、羅馬に入りて市民を綏撫し、次で西班牙に赴き、ポンペイウスの黨與を平定し、更に兵を率ひて希臘に入り、紀元前四八年ポンペイウスと、テッサリアのフハザロスに戦て大に之を破りしかば、ポンペイウス僅に身を以て免れ、遁れて埃及に入り、埃及王の殺す所となれり。ケーザル之を知らず、追撃して埃及に至り、始てポンペイウスの首級に接し、厚く之を葬り、埃及王を殺して其姉クレオパトラを立て、埃及の主となし、更に進で亞細亞に入り、ポントス王フハルナケスを降し、次で亞非利加及び西班牙に據れる

ケーザルの治績

ケーザルの遺害

ポンペイウスの殘黨を鎮定して、紀元前四五年羅馬に凱旋し、終身總頭に任ぜられ、又大都督の稱號を受け、文武の大權を掌握せり。

ケーザル天資英邁、文武に通曉して、其治績甚だ多く、大に兵制を改革し、財政を整理し、貸借の弊を矯正し、公田の借耕を制限し、羅馬市民の特權をガリア人に與へ、ソキゲチス、フラビウスの二人を用ひて曆法を改正し、農工商を興とし、文學技術を獎勵せり。

後、ケーザルバルチア國を征し、クラッススの讐を復し、且つ羅馬東方の版圖を擴張せんとせしが、元老院議員カシウス、フルッス等、ケーザルを以て終に共和政府を顛覆し、帝王たらんと欲する者となし、密に相謀りて



アントニ  
オス  
非  
ア  
オ  
ス  
タ  
ヌ  
ク

紀元前四四年三月十五日元老院に於て之を刺殺せり。  
ケイザル の死後、其部將 マルクス・アントニウス 市  
民を激して プルツス、カシウス 等を逐ひ、ケイザル  
の養嗣 カイウス・オクタヴィアヌス と結ひ、又 レビツス  
と結ひて第二回の三頭政治を組織し、平生敵視せる者を殺戮  
して其財産を没収せり。

第二三頭  
政治

次で オクタヴィアヌス は アントニウス と共に兵を  
率ひて希臘に入り、プルツス カシウス 等を伐ち、フィ  
リッピ に戦て大に之を破りしかば、敵將皆自殺せり。  
是に於て羅馬の版圖を三分し、オクタヴィアヌス は西部  
を領し、アントニウス は東部を領し、レビツス は亞非  
利加を領せり。後 オクタヴィアヌス 及び アントニウス

アントニ  
オス  
の  
敗  
死

の二人相結托し、レビツス の權を収めて、其領地を略取し、  
オクタヴィアヌス は 羅馬に居り、アントニウス は ア  
レクサンドレイア に居りて各東西に割據せり。然るに ア  
ントニウス は バルチア を征して敗れ、又 プトレマイ  
オス 家最後の女王 クレオパトラ の容色に迷ひて、其妻  
を離婚し、羅馬の領地を クレオパトラ に與へ、其生子二人  
を亞細亞の地に封ぜしかば、オクタヴィアヌス 此の機に乗  
じ、人民を激して開戦を布告し、紀元前三一年希臘の西岸 ア  
クチオン に戦て大に アントニウス、クレオパトラ の  
軍を破り、進で アレクサンドレイア を陥れしかば、アン  
トニウス 先づ自殺し、クレオパトラ は オクタヴィアヌ  
スの軍に降り、次で自殺せり。



### 第三期 帝政時代

#### 第一章 羅馬諸帝

オクタ  
アヌス  
非

オクタ非アヌス は ケーザル の死後内亂再び起りて人民塗炭に陥り、平和を冀ふの念熾なるの機に乗じ、徒手にして天下を平定し、大都督の職に登り、又元老院首領に任ぜられ、アウグスツス (尊大の意)の稱號を得て皇帝の實力を有せしが、深く ケーザル の失敗に鑑みて、帝號を避け、唯 ケーザル と稱して、猶共和政の外形を存せり (後世帝王の稱號なるケイザルより轉訛し、來れる者なりといふ)。

羅馬帝國  
の版圖

此の時に當りて羅馬の版圖は頗る廣大にして、東南は エウフラテス 河より亞非利加の北部に亘り、西北は大西洋よ

羅馬極盛

り レヌス (今のラ) イステル (ダヌブイアスとも稱し) 兩河及び黒海に連なれり。アウグスツス は猶其版圖を擴張せんと欲し、兵を出して、ゲルマニー 人を征せしが、其酋長 アルミニウス なる者、羅馬の將、ブルス と チュートベルゲル、ワルド に戰て之を殺し、羅馬の全軍殆んど陣没せり。

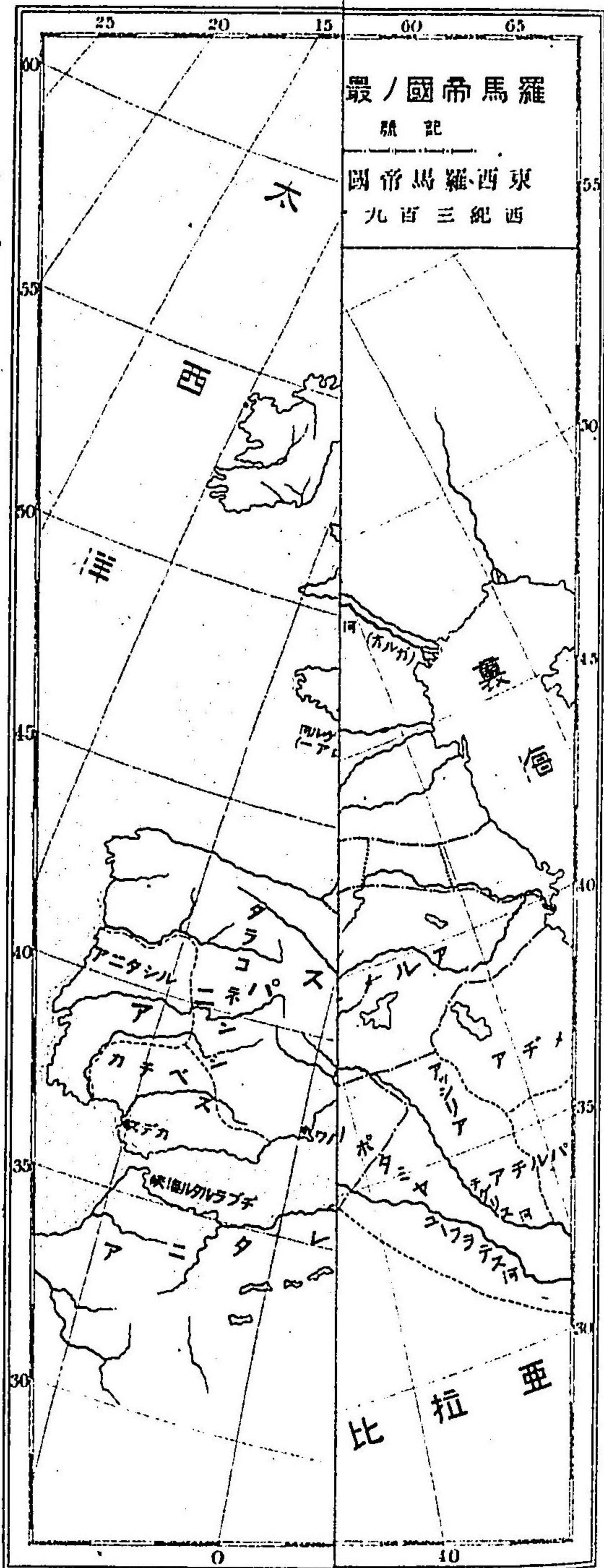
是に於て、アウグスツス は専ら外征の念を斷ち、心を内治に傾け、大に兵制を改革して海軍を擴張し、地方制度を革め、風俗を改良し、農工商を興隆し、水道を敷設し、溝渠を開鑿し、廣大なる軍道を開築せり、殊に羅馬府の如きは市街を改正して之を十五區に分ち、殿堂、戲場、浴室、競馬場、凱旋門等の如き、諸種の大建築物を以て之を裝飾せしかば、アウグスツス の嘗て誇稱せしが如く、瓦造の羅馬は今や一變して大理石の羅馬となれ



アウグス  
ツス時代

羅馬帝國

り。加之、アウグスツスは、大に文學技術を獎勵せしかば、希臘征復以後養成せられたる羅馬の文華は、此の時に至りて隆盛の極に達し、所謂、アウグスツス時代の盛況を現出せり。アウグスツスの歿後、チベリウス、カイウス、クラウヂウス、チローの如き、アウグスツス家の諸帝位に即き、殆んど百年間羅馬帝國を統轄せり。其間、チベリウスの、ゲルマニー征伐及び、クラウヂウスの、ブリタニア征服等ありき。アウグスツス家の系統は、チローに至りて斷絶し、フラヴィウス家の三帝代りて位に即き、次で紀元九六年より一八〇年に至るの間、チルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス等の善良なる五帝位に即き、内には善政を施し、外に









羅馬衰微  
の傾向

は羅馬の版圖を擴張せり、故に史家此の五帝の時を今古の歴史中最長の時代と稱す。就中　トラヤヌス　帝は　イステル河北の　ダキア　人を屈從せしめ、又　バルチャ　國と戰てアルメニア、メソポタミア　及び　アッシリア　の諸國を奪ひ、東方の領地を擴張して裏海に達せしめしかば、羅馬の版圖は此の時を以て空前絶後の廣大を極めたりき。

然れども五帝の後東方には、波斯に　ササン　朝起り、バルチャ　に代りて屢羅馬の邊境を亂すあり、北方には　ゲルマニー　人種の　レヌス　河邊に逼りて間隙を窺ふあり、イステル　河畔には　ゴート　人の入寇するありて、國家は漸く危難の地位に陥れり。

マルクス、アウレリウス　の子　コンモルス　は酒色に耽



りて寵臣權を專にし、終に一九二年至りて暗殺せられ、セ  
 プチミウス・セゲルスなる者兵士に擁立せられて位に即けり。  
 是より後二八五年に至る迄殆んど百年間帝王廢立の權は一  
 に兵士の手に歸せり。加之セプチミウス・セゲルスの子  
 カラカルラ帝は羅馬の市民權を全帝國の自由人民に與へ  
 しかば、從來夷狄視せられたる外國人にして、兵士の推戴を受  
 け、皇帝の位に登る者あるに至れり。二八四年デオクレチア  
 ヌス帝位に登り、大に政体を改め、強固なる専制君主政の基  
 礎を置けり。又帝は其版圖廣大に過ぎ、到底一人の君主を以て  
 統轄し難きを感じしかば、之を兩分して、自ら東方を領し、都を  
 ニュメデアに遷し、西部は其將マキシミアヌスに  
 管せしめ、アウグスツスと稱してミラノに都し、各

ケーザルと稱する補佐一人を置きて國政を合議せり。然る  
 に帝の歿後内亂起り、三三二年コンスタンチヌス再び天  
 下を一統し、翌年國都をビザンチオンに遷し、之をコン  
 スタンチノポリスと名けたり。  
 コンスタンチヌス帝遺命して帝國を三子に分與し、爲め  
 に再び内亂を生ぜしが、三五三年第二子コンスタンチヌス  
 更に之を一統せり。然るに三九五年テオドシウス帝の歿  
 せしや、其子アルカヂウス及びホノリウスの二人帝  
 國を分割し、アルカヂウスは東羅馬帝國を領し、ホノリ  
 ウスは西羅馬帝國を領して、確然東西に分立せり。



### 第二章 基督教の蔓延

耶蘇基督

基督教の開祖耶蘇基督は、アウグスツス帝の治世中猶太國に生れ、猶太の一神教に由りて新に一教を開き、博愛主義を唱道したりしが、其説時人の容るゝ所とならず、反逆者を以て目せられ、エルサレムの郊外に磔殺せられしかば、其弟子四方に散じて其教を傳へたり、之を耶蘇の使徒と稱す。

基督教の蔓延の原因

基督教が現今の如く世界に蔓延したるは、其原因實に基督教の博愛主義が羅馬の如き大統一的の國家に適合して洽く其廣大なる版圖に流布したるに歸せざるを得ず。當時若し羅馬の大統一無かりせば、基督教は其弘通力を失ひ、終にシリアの國教に止まりしならん。然れども基督教は羅馬帝國と

羅馬人の宗教心

相投じ、羅馬世界に行はれ、羅馬の志風に養はれて、其中に萌せる世界統一的教義を發達するを得たりき。而して羅馬人が基督教を信奉したるの原因は、元來羅馬人が古代の他の國民に比するに能く道德を重じ、シエム人種の教の如き淫猥なる多神説を嫌ひ、基督教の如き比較的純潔なる一神説を愛したるに由る。夫れ此の如く基督教は、羅馬人の志風に適合せしかば、羅馬人の之を信奉する者多く、其信徒は教の爲には敢て死をも恐れざるに至り、其言行屢、羅馬の安寧秩序を紊亂せんとするの傾向ありしかば、チロー以來代々の皇帝多くは之を嚴禁して其教徒を虐遇せりと雖も、信仰の情は益、厚きを加へ、信徒は益、増加せり。ユンスタンチヌスは基督教の性質を洞察して其禁を解き、自ら進で其信者となり、之を羅馬の國教

ユンスタンチヌス



に採用せり。此に於てか基督教は羅馬帝國に蔓延し、其結果は終に現今の隆盛を見るに至れり。

ニカイアの萬國宗教會議  
ニカイアに開きて、信仰箇條を制定し、全國民をして此の信條に據らしめ、アレイオスの唱道せし一派を嚴禁せり。然れども全教徒必しも此信條を固守せしにあらず、各其地方に従ひて其教旨を異にし、互に相論争せり。後ユリアヌス帝は、力を極めて羅馬舊來の宗教を恢復せんと勉めたりしが、基督教徒益増加し、テオドシウスの時に至りては、舊來の宗教を奉ずる者なきに至れり。

ニカイアの萬國宗教會議  
ユリアヌス

### 第三章 チュートン人

チュートン人

チュートン人は、アリア派に屬し、紀元第一世紀の頃には、イステル、レヌス、兩河及びカルパチア、山と北海及びバルチック海との間を占領せし大民族にして、羅馬人は彼等を一大人種と認め、之を日耳曼人と呼べり。

其特質

當時チュートン人は村落に住居して農業、牧畜に従事し、勇壯活潑にして戦を好み、婦女を尊敬し、自由を愛重して、稍完全なる政体を組織し、且つ其習慣より成れる法律制度を有せり。

人民の階級

人民は貴族、良民、半良民及び賤民の四階級に分れ、貴族及び良民の兩者は共に君を戴かず、土地所有權、參政權並に裁判會



に列席するの權等を有し、兵役の義務ありて租税を納めず、唯貴族は良民に比して其門地高きのみ。半良民は土地を所有すれども他の權利を有せず、隨て兵役の義務を有せず。賤民には捕虜及び生れながらにして賤民たる者の二種ありて共に主人に屬し、其主の土地を借耕して租税を納むる外一切の權利義務を有せざりき。

民會

チエートン 人は初め王を戴かず、主權は貴族及び良民より組織せられたる民會の握る所に於て、宣戰媾和を議し、官吏を任命し、或は重大なる訴訟を判決せり、而して民會に列席する者は必ず槍と盾とを携へ、提出せられたる議案に反對する者は黙し、賛成する者は槍を以て盾を打ち、且つ聲を發するを常とせり。羅馬の史家 タキツス は日耳曼人中二三の種族

地頭

總督

史上重要なるチエートン種族

に王を戴けることを記せりと雖も、是等は皆民會より選出せられて部落を統轄せる地頭に於て王にあらざり、地頭は平時は行政を司どり、又裁判會に長となり、戰時は其部落の大將となる者にして、其上に數部落を總轄せる總督ありしが、後平時にも猶總督を置き、之を エアルドルマン と稱せり。

チエートン 種族の重要なる者は ゴート 人、 フランク 人、 ヴンダル 人、 ブルグンド 人、 ロンゴバルド 人、 アングル 人、 サクソン 人及び スカンデナヴィア 人等となす。而して是等諸人種が始めて史上に重要な影響を及ぼせるは實に羅馬滅亡の時にありとす。

第四章 西羅馬帝國の末路



ゴート人

フン人

初め中部歐羅巴に住せしゴート人は屢羅馬の邊境を侵して争亂息む時なかりしが、羅馬は概ね之を撃退せり。然るに第四世紀の末に至り、亞細亞の蠻民チユラニア種の一派フン人西轉し來りて、チュトン種族の地に侵入せしかば、ゴート人之を避けんが爲め、三七六年羅馬帝の許可を得て、イステル河の南岸に移住せしが、羅馬人の虐待を受けて忽ち反亂を起せしかば、グレンス帝は之と戦て陣没せり。是より以後ゴート人は常に羅馬帝國の内地に居住し、多くは兵役に服事せり。

三九二年テオドシウス帝再び全帝國を一統し、國勢稍恢復したりと雖も、其歿するや羅馬は東西に分裂して、國勢又振はざるの時に當り、ゴート人は其王アテリックを

クアリック

グンダル人

奉じて西羅馬に侵入し、遂に羅馬府を略取せり(紀元四一〇年)。次でアテリック死し、アツタウルフなる者之に代はり羅馬官吏の名を假りて、西班牙に赴きしが、四一五年を以て暗殺せられしかば、アテリックの子ワルヤ、ゴード王の位を継ぎ、グンダル人と戦ひ、大に之を破れり。是に於てワンダル王ゲンセリック其衆を率ひて亞非利加に移り、其地を占領して、グンダル王國を創建せり。

アツチラ

當時ラ今のツラオルガイステル兩河間の地を占領せる、フン人の王をアツチラといひ、頗る勇名あり、四五一年亞非利加のグンダル人と結托し、先づ兵を率ひて東帝國に寇し、更に西方に轉じてガリアに侵入せしかば、西羅馬の大將エーチウス、西ゴート王テオドリックと兵を合せ



カタラウ  
ユの役

共に之をカタラウニに迎へ、大に之を撃破せり。

アツチラは更に轉じて以太利に入り、到る處を焚掠し、  
アクイレイア<sup>今のチチャ</sup>を破壊し、將さに羅馬を屠らんとせしが、  
遂に和を容れて軍を班せり、然るにアツチラは後四五三  
年に至りてイスタル河畔に病歿せしかば、其廣大なる邦  
土忽ち瓦解せり。後二年を経て亞非利加のブンダル王  
ゲンセリック兵を率ひて羅馬に侵入し、殺戮劫奪を縱にし、  
羅馬の珍寶貨財を載せて歸國せり。

羅馬帝國  
の滅亡

是より先き西羅馬帝國は、衰亡日に甚しく、皇帝は唯虚器を  
擁するのみにして、實權蠻人の手に歸せり。終に蠻將オドア  
ーケルなる者、ロミユルス帝を追ひ、自立して以太利王  
と稱し、羅馬の議官をして其意を受け、西帝國に皇帝を置くの

ブンダル  
人の侵入

必要なきことを東帝ゼノーに建議せしめ、其許可を得て  
オドアーケルは、パトリキウスとなり、以太利を統轄す  
るに至り、西羅馬帝國終に滅亡せり、時に紀元四七六年なり。

### 羅馬の文明

羅馬人の  
長所

羅馬人は創始精巧に於て、大に希臘人に劣れりと雖も、其征  
服したる蠻族を教化して文物制度を後世に傳へ、世界の文明  
を進めたる功績は甚大なりとす。

内亂時代  
の文華

羅馬の文華は、希臘征服の後漸く發達し、内亂時代に至りて  
隆盛に赴けり、當時キケロ、ケーザルの二人は雄麗なる  
散文を作り、殊にキケロは能辨を以て名を著せり、其他  
ルクレチウス、カツルス<sup>の如き</sup>、著名の詩人輩出せり、而し



アウグス  
ツス時代  
の文華

て羅馬文華の極盛に達したるは、アウグスツスの時なり  
とす。アウグスツス帝は大に文學技術を獎勵せしかば、詩  
人に、オネヂウス、非ルギリウス、ホラチウス。史家に  
サルステウス、リ非ウス等の諸大家輩出せり。故を以て後  
世文華隆盛の時代を指して、アウグスツス時代と稱す。然  
れども是等の大家は皆共和政の末路に當りて教育せられし  
者多し。紀元第一世紀より第二世紀に當りては史家に、タキ  
ツス、哲學者に、セネカ最も其名を著はせり。

帝政時代  
の文學者

羅馬の技術も又、アウグスツス時代に於て大に發達せ  
しが、王政時代に於ても既に宏大なる土木を起せり。外國征服  
時代の末に至り、文明諸國の感化を受けて大に羅馬府を裝飾  
し、次で、アウグスツス帝の時に及びては益壯麗を極め、其

宏大なること古今に絶倫せり。



中世史の範圍

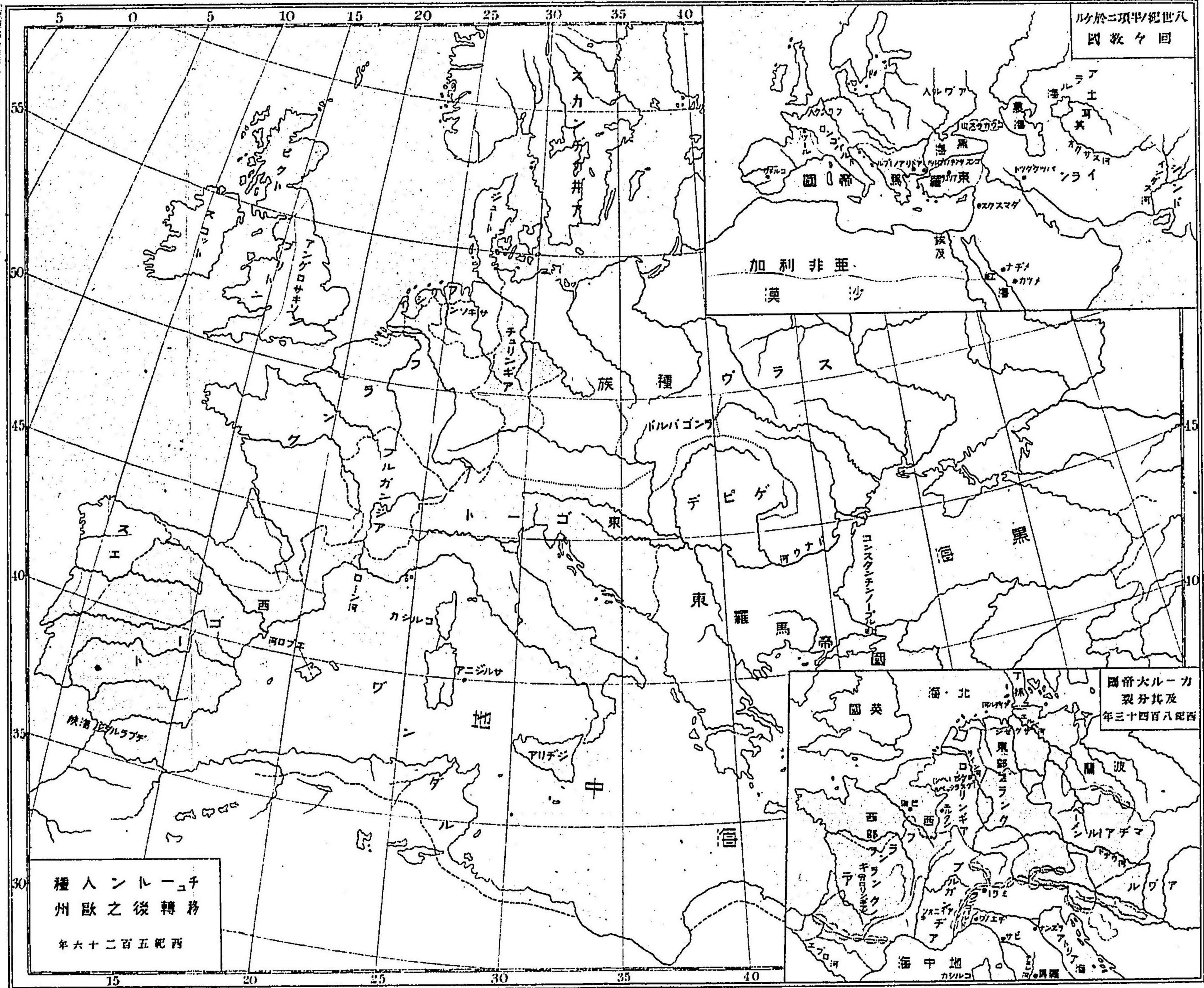
中世の區分前期の形勢

後期の形勢

### 第二編 中世史

紀元四七六年西帝國の滅亡より第十五世紀前後に亘れる間の歴史を中世史と稱す。

中世は社會變化の勢其赴きを異にするに由りて之を前後二紀に分つを得べし。即ち前期は希臘羅馬の開明より所謂中世の情態に遷るの時期にして、チュートン、拉丁の兩元素互に相衝突し、獨逸の野蠻人は羅馬を侵して、拉丁人の開化を撲滅し、羅馬帝國の大版圖は土崩瓦解し、チュートン 種族の王國各地に興りて、轄據的精神發達せる時期をいひ、後期は普通に所謂中世にして、前期に於て戰勝者たる チュートン 人は被勝者たる拉丁人と混じて其感化を受け、基督教は能く天下の





民心を繋ぎて、キユートン、拉丁兩元素混合の主素となり、爲めに政治上並に宗教上に統一的思想發達し、更に變遷時期を経て一新文明の近世に到達せり。

中世前紀　西羅馬帝國の滅亡より　カー

ル　大帝國の建設に至る

(紀元四七六年　同八〇〇年)

第一章　キユートン　種族の王國及

び東羅馬帝國

東  
ゴ  
ート  
王  
國

東　ゴート　王國(四九三年—五五五年)　紀元四七六年

オドアーケル　の西帝國を倒して以太利を領し既に十餘年  
に及ぶや、ドナウ　河の西岸　メエシヤ　の東　ゴート



西ゴート王國

王 テオドリック は東帝 セノールの許可を得て以太利を攻め、之を併呑して四九三年東ゴート王國を建設し、ラズンナに都し、國勢頗る隆盛を極めたり。  
西ゴート王國(四一五年—七一一年) 西帝國滅亡の時に當り、西ゴート人ハ西班牙及び南方ガリヤを領せしが、後フランク人の追ふ所となり、ピレネイ以南に退き、僅に西班牙を保てり。

ブルグンド王國

ブルグンド王國(四四三年—五三四年) ゴート人の一派、ブルグンド人は五世紀の始め今の佛蘭西の東南、ローン河邊及び瑞西の西方を占領すること九十餘年に及べり。  
グンダル王國(四二九年—五三四年) グンダル人はカルタゴに都し、亞非利加北部、コルシカ、サルデニヤ

グンダル王國

メロ井ヒ朝のフランク

等を領し、頗る隆盛を極めたり。

メロ井ヒ朝のフランク王國(四八六年—七五三年) フランク人は第三世紀の末葉、ライン河の西岸に移住し、西帝國の滅亡後、サル、フランク、王クロド井ヒ(クロド井ヒ)の統一する所となるに及びて、勢力大に振へり、クロド井ヒは漸次其版圖を擴張し、ガリアの東北に當れるアラマンチン王國を滅ぼし、亦其東なるブルグンドを併せ、西ゴート人を逐ひ、都をロテチヤ今の巴里に定め、メロ井ヒ朝の基を開けり。

ロンゴバルド王國

ロンゴバルド王國(五六八年—七七四年) ロンゴバルド人はドナウ河の上流に起り、以太利に侵入し、殆ど全半島を征服し、一王國を建設し、都をバギアに定めたり。



アングロサクソン人

アングロサクソン人 初めブリタニアは羅馬人に征服せられて其屬邦となりしが、第五世紀の頃羅馬の勢力衰微して其鎮兵を撤去せしに乘じ、チュートン種のジュート、サクソン、アングル人等海を渡りて侵入し、ケルト族のブリトン人と戦ひ、六〇〇年に至り全く之を平け、七王國を建設せり、是等チュートン種族の侵入者を總てアングロサクソン人と稱し、其地をアングリヤ即ちイングランド、サクソン人と稱せり。而してアングロサクソン人は他のチュートン人と異なり、羅馬の文物制度は盡く破壊し、自國の言語宗教は固く之を保守したり。

スカンデナヴィア人

其他歐洲の西北には、瑞典、諾威、丁抹三國民の祖先なるチュートン種のスカンデナヴィア人ありて、九世紀に至り

拉丁語とチュートン語

北人として世に知られたり。

以上の如く西帝國の版圖にチュートン種族の移住せし爲め數多の新國を生ぜしが、戦勝者たるチュートン人は被勝者たる拉丁人と混じて其感化を受け、拉丁人の法律言語習慣等を採用せしかば、チュートン、拉丁兩元素の混和せる新國民を生ずるに至れり、殊にチュートン人が拉丁人の言語を採用したるの結果は遂に以太利語、西班牙語、佛蘭西語、プロヴンサル語等の如きローマンス語を形成せり。然るに帝國以外の蠻族は猶其固有のチュートン語即ちドイツ語を使用せり。

東羅馬帝國

ローマン語とドイツ語

東羅馬帝國は五二七年ユスチニアヌス帝位に登り、其將ベリサリウスをして五三三年兵を率ひて亞非利加及



び地中海の諸島を占領せしめたり。翌年、ペリサリウスは進で、ヴンダルの王國を滅ぼし、次で大に以太利を征服して東ゴート王國を滅ぼし、東羅馬より總督ゴネリウスをラゼンナに置きて以太利を管轄せしめたり。帝は心を内治に傾け、國內に到る處に病院、水道、其他有用なる土木を起し、又國境に城塞胸壁を築きて外敵の侵入を防げり。然れども帝の事業中最も著明なる者を羅馬法典コルプス・イuris・キリガの編纂となす。此の法典は帝がトリボニアヌス以下十六人の法律學者に命じて編纂せしめし者にして、現今英國を除き歐洲各國法律の基礎をなせる者なり。

東帝國はユスチニアヌスの歿後、西にはドナウ河の上流にロンゴバルド人ありて屢、羅馬を強迫し、遂に五六八年以太利に侵入し、之を併呑して、ロンゴバルド王國

東帝國の衰頹

サラセン帝國の興起

亞拉比亞人

を建設せるあり、東には波斯の勢力益々隆盛に赴き、埃及、シリア及び小亞細亞を併呑して屢、東帝國の邊境を侵畧せるありて、其版圖大に縮少せられたり。東帝ヘラクリウスは兵を小亞細亞に出し、波斯王クスロース二世の軍を撃破して、其失ひし地を恢復せしが、帝の末年、サラセン人東方に興起し、シリア、埃及を侵略して、遂に羅馬の勢威を打破せしのみならず、破斯及び西ゴートをも討滅して、其地を併呑せり。

### 第二章 サラセン帝國の勃興

亞拉比亞人はシエム派に屬し、一名をサラセン人といふ。サラセンとは蓋し沙漠の子の義ならん、其國到る所渺茫たる沙漠横はるを以て嘗て外國の侵畧を被りしことなかりき。



ムハムメ  
ツド

其宗教は偶像教にして星辰隕石を拜せしが ムハムメツド  
 生誕の前既に猶太及び基督兩教徒の傳道する者ありき。ム  
 ハムメツド は紀元五七〇年 メッカ に生れ、幼にして父  
 母を失ひ、少壯隊商に伍して四方に旅行し大に知見を擴め、殊  
 に猶太、基督二教の感化を受け、屢、深山に隱栖して潛思考究し、  
 遂に一派の宗教を開創して自ら眞神の豫言者なりと稱せし  
 かば、メッカ 人の怒を招き、紀元六二二年七月十六日 メ  
 チナ に遁れたり、ムハムメツド 教徒は此日を ヘジラ  
 と稱して紀元元年となす。後 ムハムメツド は メチナ  
 人を率て メッカ を陥れ、十年を出でずして悉く亞拉比亞  
 半島を征服し、散亂せる諸部落を糾合して一國民となし、以て  
 サラセン 帝國の基礎を建設せり。

ヘジラ

亞拉比亞  
人の侵略

ムハムメツド は更に外國に其宗教を擴張せんと欲せし  
 が、六三二年熱を病で歿し、其義父 アブベクル 立ちて自ら  
 ハリフハ と稱せり、ハリフハ とは繼續者の意にして宗  
 教及び政治の大權を有せる主治者をいふ。爾後 ハリフハ等  
 ムハムメツド の遺志を紹ぎ、絶えず征服を事とし、到る所人  
 民に其經典——コーラン、朝貢、干戈の三者を撰はしめ、東は  
 波斯を攻略して サ、ン 朝を滅ぼし、猶進で印度の西部  
 シンド に轉達し、又 オクサス 河を渡りて土耳其人を征  
 服し、西は シリア、埃及及び北方亞非利加を悉く併呑し、又西  
 班牙を征服して西 ゴート 王國を滅ぼし、七一一年更に進  
 で ガリア に侵入せしが、七三二年 カール・マルテル の  
 爲めに大に ツール に破られ、退て西班牙を保ち、爾來七百

カール・  
マルテル



餘年間之を占領せり。

朝 オムミア

其後 サラセン 帝國の主權は第五代の カリフハモ  
 アウイア 一世の時より代々 オムミア 家に歸したりし  
 が、幾許もなくして ムハムメツド の叔父 アバツスの  
 子孫等 カリフハ の相續に關して異議を唱へ、争亂踵を接  
 して起り終に 七五〇年に至り アブルアバツス なる者  
 オムミア 朝を滅ぼし、都を バグダード に遷して アバ  
 ツス 朝の基を開けり、是に於て オムミア 家の一族 ア  
 ブドアルラーマン なる者遁れて西班牙に入り、七五六年自  
 立して ハリフハ と稱し、ユルドヴァ に都し、以て ア  
 バツス 家に抗せり。後 バグダード の アバツス 朝は土  
 耳古人の侵入を受けて國勢大に衰頽し、加之内訌屢起りて國

朝 アバツス

サラセン 帝國の分裂

亞拉比亞 人の文化

内分裂せしかば、ハリフハ は次第に其政權を失ひ、法王と  
 して漸く其教權を維持せしのみ。

以上の如く亞拉比亞人は西班牙より亞非利加の北岸を經  
 て シンド 及び中央亞細亞に至るの地を征服し、之に 自  
 國の言語、風俗、宗教を傳播せしのみならず、盛に文學技藝を奨  
 勵せしかば、希臘羅馬の文明歐羅巴に地を掃ひたるの時に當  
 り、バグダード 及び ユルドヴァ は共に亞拉比亞文明の  
 中心となり、中世歐洲の文明に裨益せし所尠からざりき。

### 第三章 フランク王國の興隆

チニートン 種族の侵入に由り、羅馬帝國の大版圖土崩瓦  
 解せるの時に當り、羅馬の文化の全く滅却せざりしは、基督教

羅馬法王 の起原



東西兩教  
分離の原  
因

の力に由る者とす。初め基督教會は羅馬に一僧正を置き、之を  
ハツバスと稱し、名義上東帝の管轄に屬し、總督の認可を經  
て就職し、四方に派遣せる宣教師を監督せしめしが、皇帝羅馬  
に常住せざりしより、漸次僧正の權威を増進し、隱然王侯の如  
く尊重せらるゝに至れり、後偶像破毀の議起るに及び、羅馬の  
僧正は東帝の禁令に反對し、希臘教會と分離して新に羅馬教  
會を設立し、初めはロンゴバルド人に結托し、次でフラン  
ク人に倚りて益、其權勢を擴張し、後終に土地所有の權と生  
殺與奪の權とを得て政治上に勢力を占め、教俗二權を併有せ  
る羅馬の法王となれり。

羅馬法王  
とフラン  
ク人

此の如く羅馬法王が フランク人に結托せしは 當時  
フランク人が加特力教を奉じて法王を尊信し、且つ其君主

メロキ  
朝

權強固にして其人民能く調和せるを以て、法王は之に倚り東  
帝に拮抗して羅馬教會を保護せしめんと欲したればなり。然  
るに フランク人は此の機に乗じて法王と結托し、宗教上  
に於ける法王の勢力を利用して、チュートン人を統一し、  
遂に拉丁、チュートン 兩元素の一大合同を完成せり。

初め フランク王 クロド非ヒの歿せしや、フラン  
ク人の習慣に由りて其四子遺領を分轄せしかば、メロキ  
朝の勢力漸次衰頹して實權家宰ゴトマヌスの手に歸し、王は唯虚器  
を擁するのみなりしが、後カール、マルテルの子 ビピン  
家宰の職に登るに及び、終に七五一年貴族僧侶及び兵士より  
成れる集會の決議を経て、國王を寺院に幽閉して自ら フラ  
ンク王となり、カロリング朝の基を開けり。ビピンは



法王領の起原

七五四年に至りて法王より フランク 國王たる塗油式を受け、翌年法王の請に應じて ロンゴバルド 王 アイヌツルフ を討じ、之を破りて其領地の一部を割かしめ、之を法王に與へたりき、之を、メトリスワタリ法王領の起原となす、七六八年 ビビン 歿し、其二子 カール 及び カールマン 共に王位に登りしが、七七一年 カールマン 歿し、カール 獨り王權を握れり、カール 大帝又は カル、ス 大帝と稱せらる、者是なり。カール 大帝は蓋世の英雄にして、其志望は主として チュートン 人の政治思想と基督教會の結合力とを利用して羅馬帝國を再建せんとするにありき、故を以て ロンゴバルド 王 デシデリウス の法王領を侵略したるを聞くや、直ちに兵を率ひて以太利に入り、デシデリウス を降し

カール大帝の雄圖

て ロンゴバルド 王の鐵冠を奪ひ、次で屢 サクソン 人を征して之を基督教に改宗せしめ、スラヴ 人と戦て、ペーメン の一部を略し、ドナウ 河邊の アヴァル 人を驅逐して遠く之を却け、又西班牙を攻めて エプロ 河北の地をへ奪り。

カール大帝の版圖

カール は西は エプロ 河より東は エルベ 河に及び、北は アイデル 河より南は テゼレ 河に達せる、絶大の版圖を有し、猶 フランク 及び ロンゴバルト 二國の王と稱せしが、紀元八〇〇年羅馬府に於て法王より羅馬の帝冠を受け、カール・アウグスツスユシャイレマニと稱するに及び、三百餘年間全く絶えたる羅馬帝國は形式上再興し、是に由りて チュートン 拉丁兩元素の和合完成せり。



中世後期

カール大帝國の建設より

第十五世紀前後に至る

(第九世紀—第十五世紀前後)

第一章

カール大帝國及び其分裂

カール大帝は其大版圖の固定を謀り、都をエクス、ラ、シヤヘル(アーヘン)に置き、國內を數多のガウに分ち各知事を置き、邊境の地はマルクと稱し、各戍將を置きて之を鎮撫せしめ、別に國內を數多の法區に分ち、巡回判事を派遣して人民の控訴を判決せしめ、中央政府には毎年一回マイフェルドを開き、貴族僧侶を召集して大政に參與せしめたり。帝又農商牧畜を奨励し、學者を優待し、寺院を建て、學校を興し、殊

カール大帝の治蹟

に強迫的教育制度を布きて是れが普及を計り、勅令を發して人民の平時武器を携帶するを禁じ、是に由りて、チュートン人固有の殺伐なる氣風を消滅し、國內の秩序を守るに盡力せる等、其治蹟枚擧に違あらず。

カール大帝國の分裂

エルダンの條約

帝の歿後其子ルード非ヒ位に即き、不肖にして父の遺業を紹ぐ能はず、版圖を四子に分與せんとするや、兄弟互に相争ひ、チュートン人固有の割據的精神再發して内亂起り、終に八四三年エルダンの條約に由り、長子ロタールは帝冠、以太利及び中央フランクを、第三子ルード非ヒは東部フランクを、第四子カールは西部フランクを得て各自之を分領せしが、ロタールの歿後幾許ならず中部フランクはルード非ヒ及びカールの分割



東部  
フラン  
ク

する所となれり。

東部 フランク 獨逸又は日耳曼ともいふ 王國は ルードヴィヒの子孫皆庸暗微弱にして國勢振はず終に九一年に至りて其血統斷絶せしかば諸侯伯相會し撰舉を以て國王を定むるに決し、フランコニア侯 ユンラッド を選立せり。 ユンラッド王位に登りて不逞の諸侯を討じ、又 マチアール 今の匈牙利人 の侵入を防ぎ、大に力を國家の統一に盡せり、而して王は ザクセン 侯 ハインリッヒ と不和なりしが、其將さに歿せんとするや、之れを推立して王位に即かしめたり、是より ザクセン 王統獨逸に君臨すること五世一百有餘年獨逸をして遂に歐羅巴の最大國たらしめたり。

西部  
フラン  
ク

西部 フランク は カロリングア と稱し、代々 カ

佛蘭西  
國の起  
原

ルの子孫王位に登りしが、皆暗弱にして諸侯伯を制する能はず、國勢大に衰頹せしかば、八八七年に至り諸侯伯議してパリイ 伯 オドー を推して王位に即かしめ、爾後百年間オドーの子孫 カーリング 家と相交代して、王位に登りしが、九八七年 カーリング 家の血統絶ゆるに及び、オドーの後裔西 フランキア 侯 ユーグ、カペー 王位に登り、都を巴里に定め、カペー 王統の基を開き、其子孫相傳へて八百年の久しきに及び、カロリングア の名は遂に廢れて佛蘭西の名起るに至れり。

以太利  
及び  
ブル  
グ  
ンド

ロタール の封土即ち ロタリングア の分割せらるゝや、以太利並に ローン、サオン 兩河と アルプス 山との間に横はれる ブルグンド の地は、ロタールの子孫



に傳はりしが、後幾許ならず、ブルグンドは、カーリング家の羈絆を脱して獨立し、ブルグンド、或は、アルレス、王國と稱し、一〇三二年に至る迄繼續せり。而して以太利は後屢、サラセン人の入寇を被り、又九世紀の末に至り、南部以太利に於ける東羅馬帝領の擴張せるに會して國勢大に衰へたり。

### 第二章 北人の侵畧

北人ノルマン一に、スカンデナヴィア人は、バルチック海の西北を擁する一大半島に住し、チュートン種族北方の一派なり。半島占領の最初の年代は之を知る能はざるも遠くケイザルのガリヤ征服以前にあるがごとし。

北人は第九世紀の頃より常に小舟に乗じて、バルチック

北人

の北人移住原因

海及び北海の沿岸。ブリタニア諸島等に侵寇し、奪掠殺戮を恣にし、終に其地に移住するに至れり、而して北人移住の原因は史家之れを(一)北人固有の冒險的性質(二)君主の壓制(三)人口の蕃殖(四)長子相續の習慣等に歸す。

英國は第六世紀より八世紀に至るの間、數小國に分れて互に相攻伐せしが、終に八二七年に至り、エセックス王、エグベルト、全國を統一せり。然るに此の頃既に北人の一族、デーン人の侵寇を被り、王孫、アルフレッド、大王大に之を破りしが、其侵寇を防遏すること能はず、終に第十世紀の末に至り、デーン人全英國を征服せり。一〇一七年、クヌート王位に即き、英國、丁抹、諾威、及瑞典の一部を領して一時盛大を極めしが、王の歿後、其諸子民心を失ひ、アルフレッド

アルフレッド大王  
とクヌート王



ノルマン  
デ

大王の後裔 エドワルド 王統恢復せり(一〇四二年)。

カール 大帝の末年北人既に ガリア の海濱を侵掠して其北部に居住せしが、後西 フランク 王は其侵寇に苦しみ、遂に第十世紀の初めに至り、北人の將 ロロー を、ノルマンチー の地に封じて侯伯となし、北人の新に入寇する者を防遏せしめたり、是に於て北人漸次基督教を信じ、佛蘭西語を談するに至れり。後一〇六六年に至り、英王 エドワルド 歿し、ハロルド 伯選はれて英王の位に即くや、ノルマンチー 侯 ユーム 羅馬法王の許諾を得兵を率ひて英國に入り、ハロルド 伯を破り、全國を平定して王位に即き、井リアム 一世と稱せり。第十一世紀の初めに當り、ノルマンチー の將士等以太利に赴き、希臘人及び サラセン 人を破り、其將 ロベルト

ナポリ、  
シチリア、  
王國

ギスカルド は悉く南部以太利を征服し、次で サラセン 人より シチリア 島を奪ひて之を領せり、後 ロジャール 二世の立て國君となるに及び、法王の許諾を得て ナポリ、シチリア 王國を建てたりしが、後二世にして一一八七年至り、ホーヘンスタウヘン 家の手に歸せり。

是より先き北人は アイスランド に移住し(八六〇年)、次で グリンランド を發見し、十世紀の末葉には北亞米利加を發見せしも之を世人に紹介するに至らずして止めり。又東方には北人の一族 ルス は、バルチック 東岸の スラヴ 人を征し、後之と混交して後世露西亞國の基を創めり。

北人の  
亞細亞  
の發見  
及北米  
の起原

### 第三章 神聖羅馬帝國



オットー一世

獨逸王 ハインリッヒ 一世能く國內を統轄し、マヂーヤル人、スラヴ人の侵寇を禦ぎ大に國威を振興せしが、九三六年病を以て歿し、其子 オットー一世位に即き、英邁にして能く諸侯を抑壓し、ジャール人を逐ひ、以太利を併せ、九六二年法王より羅馬の帝冠を受けて神聖羅馬皇帝と稱し、以後獨逸に王たる者は必ず ミラノに於て以太利の王冠を受け、羅馬に於て帝冠を受くることとせり。

神聖羅馬帝國の影嚮

神聖羅馬帝國の設立は、以太利の優等なる文華を輸入して獨逸の文學技術を發達せしめ、又獨逸人中に大統一の理想を注入して其抱負を大ならしめ、獨逸帝國現今の隆盛を來したる遠因をなせりと雖も、オットー以來代々の皇帝力を以太利の統一に盡せしかば、獨逸國內に於ける王權の固定充分な

フランコニア家

らず、諸侯各割據して國家の統一を失ふに至れり。

オットー 一世九七三年を以て歿し、後五十餘年にして、ザクセン家斷絶せしかば、フランコニア家のコンラッド二世之に代れり、其子 ハインリッヒ三世は獨逸皇帝中最も有爲の人にして、外はベーメン、波蘭、匈牙利を征服し、内は帝權を振張して法王及び諸侯を抑壓せしが、其子ハイリッヒ四世に至り羅馬法王と激烈なる衝突を起せり。

### 第四章 羅馬法王

法王の專權

カール大帝國の分裂せし時に當り、法王も又其威權を失墜せしが、カールリング家の衰弱せると、獨逸人中殊に僧侶の間に大統一的の理想存在せるとに乘じ、漸く其威權を恢



復して政治上に勢力を占め、次で凡百の犯罪は上帝に對する罪惡なるが故に教會に於て處置すべしと誇稱し、終に教會は教俗兩界の罪過を裁斷するに至りしかば、皇帝は唯法王の命令執行人たるに過ぎざりき。

獨帝法王  
權の濫

第十世紀の中葉 オット 一世位に即き、當時獨逸の國內分裂して國民的感情薄きに拘らず、僧侶の團結強固なるを見之を利用して統一の基礎となし、法王を其機械に使用して、衰頽せる帝權を恢復せんと欲し、神聖羅馬帝國を建設するに及び、皇帝法王二人の主權者を生じて互に相争ふに至れり。

グレゴリ  
オ七世

一〇七三年 グレゴリオ 七世法王の位に登り、世界一切の衆生をして神を敬し、平和を得て互に相親愛せしめんには、宗教の力を以て大統一をなすに如かずと考へ、先づ僧侶の品

ハインリッ  
ヒ四世

行を矯正し、本山の改革を行ひ、次で僧侶の妻を娶り、又王侯に臣事するを禁じ、苟も其命に従はざる者は何人と雖も之を破門すべしと宣言せり。獨逸帝 ハインリッヒ 四世僧官任命權に關して此の禁令を蔑視し、遂に グレゴリオ 七世を廢せんとし、却て法王の爲めに破門せられたり。而して獨逸の諸侯はハインリッヒ 七世が帝權を固定し、諸侯を壓抑するを恐れ、此の機に乗じて廢立を謀りしかば、帝已むを得ず單身往て法王の宥恕を乞ひ、三日の後僅かに許さるゝことを得たり。然れども帝は是に由り獨逸人の國民的感情を惹起して其力を得、後幾許ならずして兵を率ひ、羅馬に薄りて之を陥れ、新法王を立てしかば、グレゴリオ 七世は サレルノ へ逃れて憤死せり。ハインリッヒ 五世も亦其父の如く法王 カリクスツス二



世と争ひしが、一一二二年 ヴォルムス の條約を締結するに及び法王皇帝の争權一時其の局を結へり。

ホーヘンスタウヘン家

ハインリッヒ 五世の歿後 フランユニア 家絶え、ザクセン 侯 ロタール 選ばれて帝となりしが幾許ならずして歿し、ホーヘンスタウフェン シュワイベン家ともいふ 家の諸帝位に登り、

インノチエンツ三世

法王と争ひしこと百餘年に及びしが、法王の勢力益加はり、法王 インノチエンツ 三世の時に及びては、法權最も隆盛を極め、佛王 フェリッヅプ 英王 ジョン の如きも皆法王に屈服せられ、英王は歲貢を納むるに至り、歐洲諸國の君主皆法王の臣奴と稱し、羅馬は復歐洲權力の中心となりしが、第十二世紀の中葉以後法王の權力漸く衰へたり。

### 第五章 十字軍

東帝國

東帝國は ユスチニアヌス 帝以來一旦其勢力を恢復せしが、後外には サラセン 人 フルカリア 人等の侵撃を被り、内には偶像破毀の如き宗教上の争擾を生じて國勢大に衰替せり。

サラセン帝國の末路

サラセン 帝國も又十世紀の頃に至り、數多の小國に分裂して、勢大に萎微し、バグダード の カリファ は其政權を失ひ、廢立の權一に傭兵の手に歸せり。次で セルジューク 土耳其人の興起せるに會し、其撃破する所となりて西部亞細亞の地を失ひ(一〇五八年)、カリファ は唯 バグダード の一市を保有して其教權を維持せしのみ。



セルジューク  
土耳其古

一〇七一年 セルジューク 土耳其の スルタン アルプ  
アルスラン は東帝 ローマノス を破りて之を虜にし、悉  
く小亞細亞に於ける羅馬領を奪略せしかば、其版圖 コン  
スタンチノポリス の對岸に達し、エルサレム も又其占領  
する所となれり。

十字軍の  
原因

初め基督教徒は パレスチナ の靈地に巡拜し、基督の墳  
墓に詣ずるを常とせり、サラセン 人の エルサレム を  
領せしや、巡拜者の爲めに利益を得ること多かりしかば、特  
之を好遇せしが、土耳其人の之を領するに及びて大に巡拜者  
を虐待せり。佛國の僧 ビエール 親しく土耳其人の暴虐を  
目撃して歸り、以太利及び佛蘭西に歴遊して、到る處聖地恢復  
の舉を起さざる可らざるを説き、大に人心を激動せり。加之當

クレルモン  
の會議

時土耳其人は勢益猖獗を極めて將に コンスタンチノポリ  
ス に迫らんとし、東帝 アレキシオス・コムチノス 書を羅  
馬法王に送りて援助を請ふに至りしかば、法王 ウルバノ  
二世は意を決し、一〇九五年 クレルモン に會議を開き、異  
教徒に對して神聖戰爭を開くに決し、翌年八月を以て征軍發  
途の期と定めたりき、是に於て從軍の士皆十字の布片を右肩  
に着け徽章とせしかば遂に之を十字軍と稱するに至れり。

十字軍の  
先驅

然るに出征の軍備未だ整頓せず、兵甲糧食未だ完備せざる  
に先ち、過激粗暴の衆民等進發の期を待つこと能はず、翌年春  
に至り ビエール を擁し、先驅して出征の途に上りしが、匈  
牙利及び小亞細亞に於て全軍殆んど戦没せり。

第一十字軍 は漸く軍備を完成し、佛國の一貴族 ゴッドフ

第一十字  
軍



エルサレム王國

ロア 之を率ひて ボスボラス の海峡を渡り、小亞細亞に入りて ニカイア を攻略し、進で アンチオキア を陥れ、漸く エルサレム に達し、攻圍奮闘數十日に亘り、終に之を占領せり(一〇九九年)。是に於て諸將相議し其征略地を統治せんが爲め エルサレム 王國を建設し、ゴットフロア を推して王位に即かしめんとせしが、ゴッドフロア は王冠を受くるを肯ぜず、單に聖墓の保護者と稱して其選に當れり、而して當時此の王國の版圖は殆んど昔時の バレスチナ に同じかりき。

軍第二十

第二十軍 一四四六年土耳其人 エデッサ 府を攻略し、エルサレム 王國危急に陥りしかば、獨逸帝 ヨンラッド三世、佛王 ルイ七世共に軍を總べ、ヨンスマンチノ

世アンリ四

(一五八九年)之を プルボン 王統の始祖となす。

アンリ 四世賢明にして大志あり、國家の統治上舊教を奉ずるの必要を洞察して之に改宗せしが、又 ナント の勅令を發して(一五八九年)信仰の自由を許可し、新教徒に舊教徒と同等の權利を與へ、始めて數十年來の内亂を平定せり。又王はカリー 侯 ロスニー を用ひて大に財政を改革し、内治を整理せしを以て國勢再び恢復し、製造商業も亦漸く隆盛に赴きしが、不幸にして一六一〇年舊教徒 ラブヤック の弑する所となれり。

### 第七章 三十年戦争

三十年戦争(一六一八年—一六四八年)は歐洲に於ける新舊兩教徒最後の衝突なり、初めは獨逸諸侯の間に起りて後歐洲全部

三十年戦争  
及其原因



ペーメン  
の反亂

の大紛擾を醸し、宗教問題は終に土地及び權力爭奪の政治的競争に變ぜり、而して其原因は史家之を(一)數十年間鬱積せる新舊兩教の軋轢競争が、ペーメンの騷擾に由り終に破裂せる(二)寺領の爭奪と(三)獨帝フルヂナンド二世が西班牙の後援に由り獨逸諸侯を壓服せんとし終に其反抗を招きたるに歸す。

初め、獨逸帝 ルードルフ二世は皇弟 マチアスと隙ありしを以て、ペーメンの人心を収攬して其援助を借らんと欲し、一六〇九年、ペーメンの新教徒に宣教の自由を許せり、一六一二年、ルードルフ二世歿し、皇弟 マチアスの帝位に登るに及び、其従弟 フェルヂナンドを、ペーメン王とせしが、フェルヂナンドは、舊教に歸依し、專ら新教徒を抑壓せしかば、ペーメン人遂に反し、其勢甚た

マチアス  
の反亂  
二世

フリードリッヒ  
二世

クリスチ  
アン四世

ワレン  
スタイン

猖獗を極めたり。會、マチアス帝歿し、ペーメン王フェルヂナンド二世帝位を繼ぐに及び、ペーメン人之を奉ぜず、別に英王 ジェームス一世の女婿 フハルツ侯フリードリッヒ五世を推して王とせり。是に於て帝大舉して、ペーメンを伐ち、フリードリッヒを追放し、併せてフハルツを奪ひ、勢に乗じて新教諸侯の地を侵さんとせり。是に於て獨逸の新教諸侯大に懼れ同盟して之に抗せしが、一六二五年に至り丁抹王にして、ホルシュタイン公なる、クリスチアン四世、英吉利和蘭の聲援を得て其盟主となり、フリードリッヒをフハルツに恢復せんと欲し、兵を率ひて獨逸に侵入せり。舊教徒には、ワレンスタインワルドスタインを本名とすなる者自ら兵を募りて獨帝に應じ、將軍チリーと共に屢、丁抹軍を破り、長



驅して シュレスヰグ、ホルシュタインの二州を占領し、進んで  
 ユットランドに入りしかば、丁抹王已むを得ず一六二九年  
 リュベックの和を結び、永く獨逸の國事に干渉せざるを誓へ  
 り、次で獨帝は回收令レタテールンネンを發し、ハツサウの和議(一五五二年)  
 以來新教徒の手に歸せし舊教徒の寺領を悉く没収し之を舊  
 教徒に與へしかば、新教諸侯復兵を起せり。是より先き、ロー  
 レンスタインは功を以て、メックレンブルグを得、其威  
 名頗る高かりしが、バイエルン侯マキシミアンの  
 猜心所となり、讒に遇ふて黜けられしを以て、チリー獨り  
 將として新教諸侯を鎮壓せり。

此の時に當り瑞典國王グスタッフ、アドルフ 賢明にし  
 て武略あり、新教徒の獨逸に撲滅せらるゝと、墺地利家の終に

グスタッフ、アドルフ

ワールステン  
 暗殺せらる

佛相リシユ  
 ユリユイ  
 兵を獨逸  
 に出す

バルチック海の沿岸に勢力を得て、瑞典の利益を妨害する  
 を恐れ、一六三〇年大兵を率ひて、ボンメルンに入り、チ  
 リーの軍を破り、ザクセン侯亦兵を擧げて之に應じ、軍  
 威大に振ひしを以て、獨逸帝は復、ワールンスタインを起し  
 軍事を督せしめたり。是に於て一六三二年諸軍リュッツェン  
 に會戦し、瑞典の軍勝利を得たりしが、其王グスタッフ陣  
 没せり。瑞典人之に屈せず猶戰事を繼續せり。後幾許ならず  
 ワールンスタインは再び讒に遇ひて黜けられ、密に欺を新  
 教徒に通じ一大諸侯たらんと企てしが、獨帝其叛を疑ひ一六  
 三四年刺客をして之を殺さしめたり。

初め佛國宰相リシユリユイは墺地利家の強大を恐れ、  
 瑞典王グスタッフ、アドルフに聲援せしが、是に至りて瑞



典人を援け兵を獨逸に出せしかば、新舊二教徒の争闘は一變して、墺地利、ブルボン、兩家覇權の争となり、佛國の將、チユレン、コンデ、等連戰勝を制し、瑞典の軍は、ボンメルン地方に轉戦して、兵威大に振ひ、獨軍屢利を失へり。

然るに、フェルデナンド二世、及び佛相、リシユリエー相次で歿し、兩軍戰に倦み、平和を望むこと切なりしかば、遂に媾和の商議を開き、一六四八年、エストフハレンの條約を以て、此の戦争の局を結び、是に由りて、(一)佛國は、メツツ、ツール、エルダン、及び、アルサス、の大部分を得、(二)瑞典は、前部、ボンメルン、リユエーゲン、島後部、ボンメルン、井スマル、及び、フェルデン、の僧領を領し、又是等の地を代表して、獨逸の國會に出席するの權利を得、(三)獨逸の國內に

エストフハレンの條約

ては、ブランデンブルグ、及び、バイエルン、は大に其領地を増加し、又故、フハルツ、侯、フリードリッヒ、五世の子孫に下、ハハルツ、を與へ、(四)和蘭、瑞西二國の獨立を認可し、(五)加特力、ルーテル、カルビン、の三派は同一の權利を得たり。

三十年戦争は獨逸に非常の災害を被らしめたり、其人口は三分の二を減じ、無數の村落小市は荒廢殘亡し、殷賑なる都府は悉く零落し、農業は廢頽し、商業は振はず、貿易工業其跡を絶ち、ハンザ、諸市の占有せし商權は和蘭、英國等の奪ふ所となり、美術は消滅し、學問は衰微し、道德は敗頽し、教育は低落し、國民は愛國自重の氣風を失ひ、國家の統一全く消滅し、其餘袂の跡は最近世に至る迄之を認むるを得たりといふ。

三十年戦争の形勢



第八章 文明

十六世紀は前紀に續きて海陸發見商業工藝の發達を來せしが、十七世紀の前半に至り文學及び科學大に振興して一般文化の進歩に一大影響を及ぼせり。

天文學

コペルニクス の後天文學上には獨逸人 ケプレル 出て遊星回轉の三大法則を創唱し、以太利人 ガリレオ は望遠鏡を發明して天文學上の研究を便にし、又一五八二年 グレゴリオ 曆成り從來の曆法を改良せり。

醫學

醫學には白耳義人 ベサリウス 始めて人軀を解剖して解剖學を創め、英人 ハービー 血液の循環を發見せり。

政治學と史學

マキアベリ 以後佛人 ボーデイン、英人 ホッブス

騎士制度

王者に與して諸侯に抗するあり、其他十字軍以來商業大に開け、諸都府の勢力増進し、王者と結びて諸侯の管治を脱するあり、火藥の發明により戰法の變更せる等ありて、遂に封建制度の衰微を速にせり。

騎士制は封建制度の結果にして且つ其精華なり、騎士とは上國君より下尋常の武士に至るまで、苟も軍事に與りし者の汎き名稱にして、重き甲冑を着け、槍を提げ、馬に跨りしを以て此の名稱あり、もと婦人を優遇し、然諾を重ずる チュートン人固有の氣象と、神を敬し、寛大を尊ぶ基督教の教義とに起因せる者なり。

騎士

長家の子弟七歳に達すれば扈從となりて王侯の城中に入り、貴婦人に陪侍して禮節を習ひ、騎士の薰陶を受けて豪俠



の氣風を養ひ、十四歳に至れば從士フロウマンとなり、常に騎士に附隨して武術を練習し、戦時は其武器を負擔し、或は其馬を率ひ、危急に迫れば奮進して闘ふを以て其任とす、二十一歳に至れば嚴格なる儀式を経て始めて騎士となり、勇氣を主とし、廉耻を重じ、義を守り、然諾を尊び、弱を扶け、強を制し、殊に宗教を保護し、婦女を優遇すべきを誓ふ。

試合

騎士制の隆盛を極めし時代にありては、武士道練磨の爲め武者修行に出づる者あり、又士氣を鼓舞せんが爲め試合トナメントの遊技大に行はれたり、試合は多くは帝王の即位、戦勝、婚禮等の祝賀に際して之を執行し、騎士は勝て貴女より賞與を受くるを以て無上の榮譽となせり。

騎士の利害

騎士は高尚、純潔且つ寛大を以て其理想とせしかば、中世の

其衰微

如き紀綱紊亂、強食弱肉の時に當り、其効果少からざりしが、宗教熱心の極、信仰の自由に反對し、傲慢の極、人民を虐待し、婦女の尊敬は稍もすれば淫猥の風に陥り易く、勇氣を愛するの風は多く殘忍に流れ易くして、其弊害も又甚大なりき。

此の如く騎士の美德は漸次腐敗して、昔時の名聲を失墜し、加之封建衰微の原因となれる諸種の事情は同じく騎士制を衰頽せしめしが、殊に火薬の發明は兵制の變更を來し、農夫も兵役に服するに及びて騎士制全く衰亡せり。

### 第八章 市府の隆興

チニートン 種族大移轉の時、其蹂躪蕩滅を免かれたる古來の諸都府は皆封建諸侯の私領に歸し、歳貢を納れ、軍資を供

市府の發達



するを例となし非常の衰頹を極めしが、後商工業の漸く發達するに及び、所在商業の要地に新舊の市府勃興し、其資力兵力共に諸侯に拮抗する者あるに至れり。而して十字軍以後商業大に興り、市府益富強を極め、其領主より諸種の特權を收得し、純然たる獨立自治の政体を組織せる者ありき。就中最も能く發達して隆盛を極め、中世の商業に重大なる關係を有する者を以太利の諸市となす。

封建制の盛時に當り、都府は其自由を維持して其商權を保持伸張し、封建君主の壓制に抵抗して海陸商路の安全を圖らんと爲め屢同盟を結べり、就中有名なる者を第十二世紀に起れる以太利のロンバルデア同盟と、第十三世紀に起れる獨逸のハンザ同盟となす。之を要するに中世に於ける市

ロンバル  
デア同盟  
とハンザ

府の發達は歐洲の文明を誘導開發せし者なりしや疑なし。

### 第九章 蒙古人及び土耳其人の侵寇

チユラニア  
ア種族の  
侵入者

チユラニア 種族中始めて歐羅巴に侵入せし者をフン人とし、次をマジアル人となす。マジアル人は第九世紀の頃より歐洲に侵入し、終に匈牙利王國を建設せり。次で第十一世紀の末葉に至り、セルジューク土耳其人亞細亞に興起して、バグダードを陥れ、埃及を取り、パレスチナ、小亞細亞を攻略して、ボスホラス海峽に出でしが、十字軍の打撃と、土耳其人内部の紛擾とに由り終に滅亡せり。然るに第十三世紀の初めに當り、蒙古人亞細亞の極東に興起して中央亞細亞を席捲し、歐洲に侵入し來りて其猛威西歐諸國



成吉思汗

震懼せしめたり。  
蒙古の酋長成吉思汗元の太祖名は鐵木真は漠北の一小部落に起り、諸部落を併呑して強大となり、長城を踰え支那に入りて金宋に寇し、次で鋒を西方に轉じて中央亞細亞の諸國及び花刺子模帝國を討滅し、更に南下して波斯を蹂躪し、別に哲伯速不台二將を遣して露西亞の南部を伐たしめたり。

拔都の遠征

一二二六年成吉思汗歿し、其子窩濶台元の太宗位を繼ぎて金を亡ぼし、次で其兄朮赤の子拔都を西都督に任じ、將軍速不台を支那より召還して之を補佐せしめ、一二三六年春を以て歐洲に向ひ進發せしめたり。拔都露西亞を侵略し、波蘭匈牙利を蹂躪し、更に獨逸の東部に入りて、シレジアを侵掠し、其猛威西歐諸國を震懼せしめしが、適、大宗窩濶台の訃至るに會ひ遂

金幹魯朶或は欽察の汗國

バグダードの陷落

伊蘭王國

勿必烈

に軍を旋せり。是に於て拔都露西亞に止まり、都を、ゲルガの河畔に建て、國を金幹魯朶と稱し、其征服せし露西亞及び其他の諸部を統御して一大國を建設し、爾來三百年間其子孫之に君臨せり、世之を金幹魯朶の汗國或は欽察の汗國と稱す。

太宗の子貴由宗定立ち、幾許もなくして歿せしかば、太宗の弟拖雷の子蒙哥憲宗位に即き、弟旭烈兀アハルユルクに命じて復西部亞細亞を征服せしめたり。旭烈兀先づ波斯を征し、次で回教教主の都バグダードを陥れ(一二五八年)、シリヤを略し、ダマスクスを降して伊蘭王國を建て、都をダマスクスに定め、以て第十四世紀に及べり。

憲宗の弟勿必烈世祖立ち、國號を元と改め、南宋を滅ぼして支那を一統し、勢に乗じて我日本に來侵すること二回に及びし



が終に其志を果さゞりき。

世祖の歿後其統轄せし金幹魯朶欽察伊蘭察合台今の土耳其斯坦の三國は皆元と分立し互に相攻伐して國威日に傾けり。

蒙古人に次ぎて歐洲に侵入し終に一大帝國を建設して今日に至るまで依然歐洲の一部に其地歩を占むる者を オットマン 土耳其人となす。オットマン 土耳其人は初めアルタイ 地方に遊牧せし一部落なりしが後蒙古人の驅逐する所となり其酋長 スレイマン 一世なる者部衆五萬人を率ひ逃れて アルメニア に入りり(一二二五年)後其子 エルトルグルール の時に至り、セルジューク 土耳其の一部 ユナの スルタン に屬して小亞細亞の西部に移れり(一二三一年)後 エルトルグルール の子 オス

蒙古の衰微

オットマン土耳其

オスマン

マン の時に至り頗る強盛を極めて小亞細亞の東帝領を蠶食し自立して スルタン と稱せり、オットマン 土耳其の稱此に起る。其子 ウルチヤン は ニカイア を陥れて悉く小亞細亞の東帝領を奪ひ(一三三〇年)歐洲に侵入してガリポリ を攻略し(一三五六年)次で ムーラッド 一世の時に至り アドリアノポリス を陥れて都を此に定めたり(一三六五年) ムーラッド の歿後其子 バヤジード 一世繼ぎ、ブルガリア、セルビア を略して匈牙利の邊境を襲ひ更に南進して マケドニア 希臘等を蠶食するに及び東帝及び匈牙利王は檄を歐洲諸國に飛ばして救援を請ひ羅馬法王も又十字軍の必要を説きしかば、一三九六年獨逸佛蘭西の騎士十萬餘匈牙利王 シギスムンド の旗下に集まり

バヤジード



土耳其人とブルガリアのニコポリスに戦て全軍敗亡し、歐洲全土爲めに震懼せり。バヤジード此の機に乗じ、一舉して東帝國を滅ぼさんと欲し、コンスタンチノポリスを圍み、其落城旦夕に迫りしが、適蒙古の英傑帖木兒の兵を進めて小亞細亞に侵入し來れるに遭ひ、倉皇圍を解きてボスポラスを渡り、一四〇二年帖木兒とアンゴラに戦ひ、大敗して虜にせられしかば、土耳其の勢威之が爲めに一時挫折せられたり。

帖木兒

帖木兒は自ら稱して成吉思汗の曾祖父合不勒合罕の兄ハリムシラツカイジュの裔孫となす、一三三六年察合臺國のサマルカンドに生れ、國亂を平定して汗位に登り、東は印度を征し、西は伊蘭國を滅ぼし、メオルギアを略し、露西

東羅馬帝國の滅亡

亞を侵略し、次で東帝の請を納れ、兵を率ひて土耳其人を破り、其版圖一時支那の西疆より地中海に及べり。

然るに、一四〇五年帖木兒病歿して其版圖分裂せしかば、オットマン土耳其人再び其勢力を恢復し、スルタン・モハムメット二世再び二十餘萬の兵を以て東帝國の邦土を征服し、一四五三年更に進で、コンスタンチノポリスを圍むこと五十三日に及び最終の東帝、コンスタンチノス・パレオロゴス戦歿して城遂に陥り、東帝國此に滅べり(一四五三年五月二十九日)。

モハムメット二世

モハムメット二世は、コンスタンチノポリスに都を定め、更に兵を出して東方に於ける、エネチア領の大半を侵畧し、アルバニー國を滅ぼし、波蘭の一部を併呑し、クリムの汗を屈



土耳其人の強勇な原因

土耳其の憲法

服し、次で一四八〇年其將アーメンドケツクに兵を授け以太利に侵入して、オトランドを陥れ人民を虐殺せしめ、更に兵を出して羅馬を取り、西部歐羅巴を席捲せんと圖りしが、一四八一年モハムメット急に歿して其企圖遂に寝り。此の如く當時土耳其人の強勇なる原因は(一)其性質の勇敢なると(二)宗教熱心の度基督教徒より強きと(三)政府の組織當時の歐洲諸國に比して極めて優れるとに歸せざるを得ず。ムラッド一世が其弟アラウツチンと共に編制せる憲法に由れば、スルタンは教俗の最上主權を掌握し、且つ全版圖の地主を兼ね、功勞ある武士に一代を限りて領地を分與し、決して世襲するを得ざりしかば、臣民は才能に隨て進退し、スルタンの握れる權力の源泉盡くること無く、國家の勢力

ヤニツアリ

列國の興起と王權の擴張

益強盛に赴けり。加之土耳其には基督教國より強壯なる小兒を貢獻せしめて訓練せる軍隊ヤニツアリー及び世襲的騎兵隊サヒスありて其強勇なる向ふ所を風靡せしめたり。

### 第十章 歐洲列國の興起

中世後期に於て最も注目すべきは、歐洲の列國概ね封建諸侯と獨立都府とを合し、強大なる中央政府を組織して國民の体面を完成せるにあり。而して王權擴張の根跡は既に前期より存在せしが後期に至りて發達の機運に到達し、更に變遷時期に至りて純然たる專制君主政の固定を見るに至れり。

#### 獨逸

二世紀の獨逸の興起



獨逸

フリードリッヒ二世

獨逸帝 ロタール二世の歿後、一一三八年、ホーヘンスタウヘン家の始祖 ユンラッド三世選はれて帝位に登り、ロタール二世の義子 エルフ家のハインリッヒを抑へんと欲して争を起せしかば、獨逸及び以太利の國中に エルフ及びワイヴリンゲン の二黨を生じて互に相軋轢せり、以太利にては之をゲルフオ及びギベリノと稱し、前者は法王黨、後者は帝黨の名稱となれり。ホーヘンスタウヘン家の諸帝中最も有名なるをフリードリッヒ一世(バルバロッサとも云ふ)となす、帝は中世の理想的英雄にして、力を極めて帝權を鞏固にし、大に民望を博せり、又帝は以太利に於ける帝權を恢復せんと欲し、前後六回法王並に伊太利諸市と戦ひしが、終に一一八三年、ユンスタンツの和議を結び

中等西洋史

百四十二

フリードリッヒ二世

大空位時代

塊地利家起る

て、以太利諸市の獨立を認可せり。後帝は第三十字軍に従事し、小亞細亞に入りて溺死せり。

第十三世紀の上半、フリードリッヒ二世帝位に登り、獨逸以太利、シチリア、三國の王冠を戴き、大に法王黨と争ひしが、一一二五〇年、其病歿するや、帝位の繼承に關して争擾起り、爾來二十三年間、國事紛亂を極めたりき、之を大空位時代(インテレクム)と稱す。後一一二七三年に至り、ハプスブルグ公、ルードルフ選はれて帝位に登り、其子、アルブレヒトに塊地利侯國(オーストリア)を與へ、塊地利家の基を開けり。次で第十四世紀の初め、ルクセムブルグ侯、ハインリッヒ七世立ち、羅馬に至りて帝冠を得たりしが、フリードリッヒ二世以來、獨逸王の帝冠を戴かさりしこと殆ど百年なりき。ルクセムブルグ家の諸帝位を繼ぐこと大凡百年に

第二編 中世史 獨逸

百四十三



マキシミリアン一世

して一四三八年に至り、境地利侯アルブレヒト二世帝位に登り、其子孫帝位にあること三百七十年の久しきに及べり。一四九三年マキシミアン一世位に登り、ナルムスに國會を開き、又、マイン河畔のフラクフルトに帝國裁判所を常置し、又、屢以太利の主權に關して佛蘭西西班牙二國に抵抗せり。

瑞西の獨立

獨逸の南境、ジュワイツ、ウリー、ウンデルワルデンの三州は、初め神聖羅馬皇帝の直轄領なりしが、後境地利家之を領するに至り、施政宜しきを得ざりしかば、三州の人民憤起して獨立を唱へ、モルガルテン（一三一五年）、ゼンバッハ（一三八六年）等に戦て大に境地利軍を破り、次で、チーフエルスの大勝（一三八八年）以後、近隣諸州の之に加盟する者多

く、瑞西終に獨立の基礎を固定せり。

### 佛蘭西

佛蘭西

紀元九八七年、ユーグカペー王位に登りて王權の伸張を計り、稍其勢力を恢復せしが、其歿後諸侯再び勢力を得て、遂に統御すべからざるに至れり。

ノルマンの大

フヒリップ一世の時佛蘭西のノルマンディー侯ギヨーム英國を征服して其王位に登り、井リアム一世と稱し、猶佛國の領地を有ちて佛王の臣下たりしが、一一五四年アンジュー侯（アンジュー家にアラント家と稱す）アンリ一の英王の位に登りて、ヘンリー二世と稱せしや、其後は佛王ルイ七世の廢后にして、アキテーンの公主なりしかば、英王の佛



佛國の王權擴張

國に有する領地は佛王の領地よりも遙に大にして、其勢威佛王を凌駕するに至れり。一一〇八年佛王 フェリップ二世位に登り、英王 ジョン の暗弱にして諸侯の離心あるを機とし、アキテーンの外佛國に於ける英王の領地を悉く没収して南方に領域を擴め、諸方に十字軍を出して大に佛國の威名を赫かし、又羅馬法王と連合して王權の伸張を謀りしかば、其孫 ルイ 九世の時に至りては、佛王の版圖は英吉利海峽及び大西洋より地中海に達せり。

佛國平民會議の嚆矢

初め佛國の議會は貴族僧侶のみを以て組織せられしが、フェリップ四世の時に至り、羅馬法王と間隙を生ぜしかば、佛王は一般國民の賛助を得んが爲め、一三〇二年議會を召集し、平民をして始めて之に參與せしめたり、之を佛國に於ける

百年戦争の原因

平民議會の嚆矢となす。

一三二八年、カペー家の男統絶え、ブルボン家のロアール伯 シャヤール王位に登り、フェリップ六世と稱せしや、英王 エドワード三世は、其母后のフェリップ四世の女たるの故を以て、佛國の王位を繼ぐの權利ありとなし、大に海陸の兵を發し、親ら之を率ひて佛國を攻め、爾來百餘年間兩國の戦争絶えざりき、世之を百年戦争と稱す。而して英軍は、クレシ、ポアチエ、アヂヤンクールの三大戰に大勝を得て、佛國の過半を陥れ、佛王 シャール七世の孤守せる オルレアンの府を圍み、其陷落旦夕に迫りしが、會、ジャンダルクと稱する一少女民間より起り、佛國を救濟すべき神諾を受け、りと稱し、佛國の人心を鼓舞して、オルレアンの圍を解き、

ジャンダルク



佛國強大に赴く

英人を國外に逐ひ、カレーを除くの外悉く其地を恢復せり。百年戦争此に終る。之を要するに百年戦争は、佛國の封建制を破壊し、王權を隆盛にし、國民的感情を惹起し、國家の基礎を固定せしや疑なし。

百年戦争後、ジャックマーなる者、シャルル七世の信任を得て大に財政を整理し、會計検査院を設立して之を監督せしめ、收税法を改良して租税を一般國民より納めしめ、軍隊の維持并に行政費は鹽稅、輸出入稅、印紙稅等を以て之に充て、又軍制の改革を行ひ、始めて常備軍を設置せり。シャルル七世歿し(一四六一年)、ルイ十一世位を継ぎ、陰謀術數を以て大諸侯の勢力を横滅し、又諸侯の血統絶えたる者は其家を滅して所領を奪ひ、銳意王權の擴張を事とせり。故を以てルイ十一世の

英國

プランタジネット家

歿後、プロアール家最後の王、シャルル八世の時に及びては、佛國王室の基礎確立して國勢大に振興し、遂に兵を外國に出して列國の猜疑を招くに至れり。

### 英吉利

井リアム一世英國を統一し、全國にノルマンディーの騎士を封じて封建の制を布き、新に法律を制定し、又朝廷の言語及び官用の文書は悉く佛語を用ふることとせり。井リアム一世の歿後、井リアム二世、ヘンリー一世、スチーブン、の三王相次で王位に登りしが、一一五四年、スチーブン王歿して嗣無く、ノルマン王統絶えしかば、ノルマン及びイングロサクソン、兩王統に親縁ある、プランタジ



大憲章と  
代議國會

エチット 家のヘンリー二世位に登れり、之を  
 ジェチット王統の始祖となす。  
 ヘンリー二世は大に心を内治に傾け、法律を改革し、軍備  
 を擴張し、又封建諸侯の勢力を削りて王權を鞏固にせしが、其子  
 ジョン 暗弱にして法王 イノチエント三世に破門せ  
 られ、遂に屈服して英國を法王の領地となし、加之重税を課し  
 て國民を苦しめしかば、一二一五年國中の侯伯、僧正等合同し  
 て王に迫り、英國國民自由の基礎たる大憲章を欽定せしめ、た  
 りき、而して大憲章は後年専制なる君主屢之を破毀せしが、國  
 民は常に之に據りて其自由を保持するを得たり。ジョンの  
 子ヘンリー三世又暗愚にして大憲章を守らず、専横を極  
 めしかば、諸侯伯兵を起して、王を虜にし、之に逼りて命を發せ

英國に於  
ける百年  
戦争の結  
果

薙薇戦争

しめ、侯伯僧正の外一地方より騎士二人、一市より市民二人を  
 召集して議會に列席せしむることとせり、是を世界に代議國  
 會あるの嚆矢となす、時に一二六五年なり。  
 一三二七年 エドワルド三世位に即き、佛王 フリップ  
 六世の即位を拒み、遂に百年戦争の端を發せり。此の戦争や、結  
 局英人の敗に歸せりと雖も、其結果はノルマン人、アン  
 グロサクソン人の區別を打破して、共に一國民たるの觀念  
 を強盛ならしめ、始めて純然たる英國國民を生出せり。  
 プランタジェチット家の王統は百年戦争終局以前即ち一三  
 九九年 リチャード二世を以て終り、ヘンリー四世、ラン  
 カストル家より入て之に代れり、然るにヘンリー六世  
 の時(一四五五年)、ヨーク家起て王位を争ひ、爾來三十年間



の騒亂を醸せり、此の時、ランカストル家は紅薔薇を記號とし、ヨーク家は白薔薇を記號とせしかば、之を薔薇戦争といふ。一四六一年、ヨーク家勝利を得て、エドワード四世王位に登り、相次ぐ三世、其間斷えず、ランカストル家と兵を交へしが、一四八五年、ランカストル家の一族リッチモンド侯、ヘンリー・チュードル、ヨーク家の軍とボスフォルスに戦て之を破り、自ら王位に登りて、ヘンリー七世と稱し、チュードル家の基を開けり、薔薇戦争此に終る。

薔薇戦争以後、貴族の權勢漸く衰へしかば、ヘンリー七世は專制を事として、致々王室を富すことを計り、義捐の名を以て、人民の財貨を納れしめ、又大憲章の規定に反し、議會の承

チュードル家

ヘンリー七世の治

認無くして課税する等、獨斷の處爲多かりき。而して王は貴族の兵士を養ふを禁ずると共に、己も又常備兵を置かざりしかば、後世政權議會に移るの時に至りて、大に影響を及ぼせり。

### 以太利

紀元九六二年、獨逸帝 オット一世の神聖羅馬帝國を建設するに當り、以太利も復其版圖に入りしが、後法王と獨逸帝との間に争を生じ、國民爲めに、エルフォ及びギペリノの二大黨に分裂して、戦亂止む時なかりしが、後獨逸帝 フリードホリッヒ・バルバロッサの以太利を征服せんとせしや、一一六七年、以太利北部の諸市連合して、ロムバルデア同

以太利の内証



ロンバル  
ヂア同盟  
及び其衰  
亡の原因

盟を組織し、以て フリードリッヒ に抗し、一一八三年終に  
獨逸の羈絆を脱して自治市となれり。然れども是等の諸市は  
同心共力の心に乏しくして互に相救濟せず、加ふるに諸市皆  
雇兵を使役し、市民自ら戦闘に従事せざりしかば、殷富にして  
勢力あるに係らず遂に衰亡を招くに至れり。

リエンジ

第十四世紀の大半は法王 アギエオン にありて羅馬は  
君主を失ひ貴族權を專にして擾亂を醸せしかば、リエンジ  
なる者人民を率ひて貴族に抵抗し、自ら護民官と稱して羅馬  
新政府の首領となれり。然るに リエンジ は以太利諸國を  
糾合して一共和國を建設し、羅馬を以て其首府となさんと企  
しが、其企圖就らずして斃れ、爾來以太利は最近世に至る迄其  
獨立を失へり。

アエチア

以太利の共和市中最も著名なる者を エチア、フレン  
ンゼ、ジェノヴァ、ピザ 等となす。

エチア は第五世紀の頃、フン 人の奪掠を避けんが  
爲め、移住せし人民の創設に係り、後商工業の進歩に伴ひて漸  
次其勢力を増加し、地中海沿岸の要地を占領して東洋諸國と  
交易し、十字軍起るに及び其船舶を以て諸國の兵士を輸送し  
て巨利を博し、最も隆盛段富を極めしが、第十五世紀に至りて  
東方の領地は土耳其人に蠶食せられ、且つ喜望峰を廻航して  
印度と直接に貿易する者あるに及び、エチア の商業全  
く衰頽せり。

フレン

フレン は、もと羅馬兵士の駐屯地なりしが、其市民毛  
布絹布の製造商業等に熟達し、又銀行を設立して大に隆盛を



メデナ家

極め終に中世紀中製造貿易財政文學技藝等の中心となれり。第十二世紀以後内亂屢起りて騷擾を極めしが第十五世紀に至りメデナ家商人より起りてフヒレンセの政務を左右し遂にローレンゾ・デ・メデチの時に至りて政權を握り大に文學技藝を奨励せり。

### 西班牙及び葡萄牙

西班牙

西班牙は第八世紀にサラセン人の侵略する所となり爾來基督教徒は西北の山中に避居せしが後回教王國の分裂せるに乗じて漸次故地を恢復し第九世紀にはナグアラ、第十一世紀にはカスチーリヤ、アラゴン、レオン等の基督教王國相踵で勃興せり。

西班牙王國の基礎  
成及及び  
のグラナダ  
の陥落

西班牙の  
王權擴張

紀元一四六九年 アラゴンの王子 フェルナンド、カスチーリヤの王女 イサベラ と婚し、次で一四七九年に至り兩國合して西班牙王國の基礎を開き、遂に一四九二年回教徒最後の根據地 グラナダ を陥れたり。

フェルナンド 及び イサベラ は回教徒を國外に放逐せし後、大に力を王權の擴張に盡し、或は市府と結托して貴族を箝制し、或は宗教裁判所を設立して異教徒を嚴罰に處し、或は統一的の刑法を編制して上下の別無く之を勵行し、或はイサベラの畫策に由りて、フェルナンド を宗教團體の長となし、且つ法王に請ひ西班牙に於ける僧侶の任免權を得て、教俗の二權を掌握し、益々專制君主政の基礎を固めて、其孫カルロス 一世(後獨逸の帝位に登りて)に傳へ、終に列國の間に覇を



葡萄牙

唱ふるに至れり。  
葡萄牙王國の基礎は第十一世紀の初め、ブルグンド侯  
ハインリッヒのカスチーリヤ王より封を此の地に受け  
し時に起る者にして、其子孫第十二世紀に至り獨立して王と  
稱するに及び、始めて葡萄牙王國を形成せり。

スカンデナヴィア及び露西亞

スカンデナヴィアとは丁抹、瑞典、諾威三國の總稱なり、第九  
第十兩世紀の間、其人民諸國を侵寇して内國の人口を減じ、且  
つ王及び貴族の争隙激烈なりしを以て、中世の間國力の振興  
を見ざりしが、一三九七年有名なるカルマールの同盟成  
り、三國は丁抹女王マルガレッタの下に合同せり。然れど  
も同盟相互の調和全からず紛争常に絶えず終に一五二三

スカンデ  
ナヴィア

瑞典の獨  
立

露西亞

年瑞典はグスタッフ、ワサに至りて獨立せしが、諾威は永  
く丁抹王の治下に屬せり。  
露西亞 第九世紀の中葉瑞典人、ルトリックなる者  
スラヴ人を統轄して露西亞の基礎を定め、後第十三世紀に  
至り蒙古人侵入し來りて露國を征服し、爾來二百年間露國は  
其壓制を被りしが、一四六二年、ルトリックの裔孫、モス  
クワ大公、ヨアン、一世の位に即くに及び、蒙古人の羈絆  
を脱し強國なる王政の基を開けり。



### 第三編 近世史

#### 第一期 變遷時期(第十五世紀前後)

##### 第一章 總論

中近二世  
境界の不明了

中近二世の境界は從來諸說紛々として定まらず、史家或は之を紀元一四五三年 コンスタンチノポリス の陥落に置き、或は之を一四九二年 コロンボ の亞米利加發見に置き、或は之を一五一七年 マルチンルーテル の贖罪符インデニヤに反對して宗教改革を創唱したるの時に置くと雖も、精密に之を觀察すれば、東帝國の滅亡は決して全歐の大事事件となすに足らず、亞米利加發見は單に地理學上の一發見に過ぎず、宗教改革

變遷時期

は第十三世紀以來既に之を企圖せる者多し、偶ルルーテルに至りて成功せるのみ、凡そ社會の變遷は不知不識の間漸次各種の方向に進行し、結局終に一新時代を生出す者なるが故に、單に年月若しくは一事變を以て時代の限界を定めんよりは寧ろ第十五世紀の末葉と第十六世紀の初年との間に介する時限に變遷時期を設けて中近二世を連絡するの優れるに若かさるべし。

人心の萎縮

中世前期に當りて歐洲は希臘羅馬の優等なる開化を失ひ、學問は僅かに僧侶の力に由りて其命脈を保ち、智識は僧侶の專有する所なりしかば、狹隘なる宗教的精神非常に勢力を占め、恐怖の情は常に人心を支配せり、加ふるに封建制は自然物經濟に依頼し、農業を以て其基本とせるに拘らず、諸侯は農民を



文明進歩の三大勢力

歐洲人に固有せる敢爲の氣象

奴隸の如く壓制せしかば、生産力益減少し、又其所領の安全を企圖して交通を便にするを嫌ひしかば、通商製造等の諸業徹々として振はず、爲めに智識上及び經濟上の萎靡を來して歐洲の人心を萎縮せしめしが(一) 歐洲人に固有せる敢爲の氣象 (二)人口の蕃殖 (三)十字軍の影響等の如き、主要なる勢力之が原因となりて、宗教及び封建の強固なる羈絆を脱し、終に近世の開化を作成せり。

(一)歐洲人に固有せる敢爲の氣象 人類の發達進歩は外界の刺激と人性天賦の優劣とに應じて其結果を異にす、故に外部に如何なる好刺激あるも、内部に優等なる天性無くんば、其人種の發達進歩は遂に望むべからざるなり、然るに歐洲人は元來敢爲の氣象を固有せるを以て、第五世紀より第十一世紀まで暗黒時代を

人口の蕃殖

經て復興の時期至るに及び、外部の刺激に應じて萎縮せる人心を伸張し、終に一大進歩を完成せり。

(二)人口の蕃殖 中世の諸制度は不完全なる者多しと雖も、之を、チュートン 人種大移轉の時に比すれば、社會は秩序を保ち安寧を得て、人民其業に安ずるを得たりしかば、人口益蕃殖して生存競争起り、單に農業のみを以て生活する能はざるに至れり、是に於て活潑にして多少冒險的勇氣と、農民に優れる才氣とを有する者は故郷を去り、商賈となりて他に遺利を探り、利益を得れば益、其企圖心を誘起し、資本を増殖して製造商業を隆盛にし、是が爲めに市場は變じて町となり、町は變じて都府となり、既に都府となりて人口資力共に滋殖するに至り、資力を以て諸種の權利を買収し、又兵備を設け、同盟を



十字軍の  
影響

結びて侯伯騎士の奪掠を防ぎ、益、商路を擴張して益、富み、遂に  
餘裕を生じて學問に志し、宗教以外の智識を得るに及び、此に  
始めて萎縮せる人心を伸張せり。

近世史の  
特質

(三)十字軍の影響は前編既に記するが如く(甲)東方の優等  
なる智識を輸入し(乙)諸國民と相接し又異人種と交はりて大  
に見識を擴め(丙)新需要を起して商業盛大を極め、金力經濟興  
りて、自然物經濟を基とせる封建制度を打破せる等の如き主要  
なる勢力は、歐洲人の智識發達に影響せること頗る大なりとす。  
以上列擧せる三大勢力は社會各種の方面に進行して、以  
下章を逐ひ叙述するが如き變遷時代の諸現象を呈出せしが、  
是等の諸現象は互に原因となり又結果となりて終に近世  
史上の特相たる(一)政權僧侶の手を脱し(二)宗教的統一廢れて

國語の確  
定と學術  
の進歩

文學上の  
復活

政治的統一起り(三)國力平均の主義盛行はれ(四)歐洲は陸地  
發見、通商殖民に依りて諸大陸に大影響を及ぼし(五)商工二業  
漸く振起して中等社會の勢力増進し(六)物質的文明其範圍を  
擴張せる等の如き新現象を作成せり。

### 第二章 文運の復興及び印刷術の發明

チユートン 人の歐洲を蹂躪するや、羅馬の文華光を失ひ、  
拉丁文學廢頽して一時其跡を絶たんとせしが、歐洲諸國の國  
語漸く確定して思想の交通を便にし、諸種の學術進歩して人  
智漸く復活するに及び、古學再び勃興して、文學に美術に一大  
新活路を與へたり。

文學上の復活 初め カール 大帝は學校を設立し、僧侶



煩瑣哲學  
と神秘教

大學

に命じて専ら神學及び希臘拉丁の文學を教授せしめしかば、第十一世紀の頃に至り、基督教の教義とアリストテレスの哲學とを混合せる煩瑣哲學起り、論理の方法に據りて神學の正確を證せんとせり。此の學派の哲學者には第十三世紀に輩出せるアルベルツス・マグヌス、ロージャト・ベーコン、トムマソ・ダクイノ、ダンス・スコタス、最も名あり。之が反動として起りたるを神秘教となす、頓悟して神光に接するの説を唱へ、頗る一世を感化せり。

煩瑣哲學に密接の關係を有する者を第十三世紀頃に於ける大學の創立となす、初め煩瑣學派の諸學士は寺院の學校に自由講筵を開きて公衆の聽講を許し、漸く盛なるに及びて遂に學校の組織をなすに至りし者にして、尤も有名なる者を巴

回教徒の  
文化

古學の再  
興

里大學となし、ポロニア、オックスホルドの二大學之に次けり。當時の大學は専ら煩瑣哲學、羅馬カノン法を授け、旁ら希臘希伯來の兩語及び理學を教授せり、而して物理化學醫學等の如きは未だ一科を爲すに至らず、天文學には、プロマイオスの天動説行はれたり。

當時回教徒は大に學藝を究め、其文化遙に歐洲諸國に優りしかば、西班牙は回教徒の治下にありて歐洲學藝の中心たりき。現今歐人所用の亞拉比亞數字を初とし、代數學化學酒精等の諸語今尙存するを見れば、回教徒が中世歐洲の文明に裨益せること少からざりしを知るべし。

以上の如く中世にては文學全く滅ひたるにあらず、且つ古典も間々文辭思想を終飾するに用ひられしが、其所説の教



義に反する者あるを恐れて深く探究せられざりき然るに第十四五世紀の交 フマニストの輩出せるによりて古學再ひ勃興せり。

古學の再興は初め以太利に起り次で他の歐洲諸國に蔓延せり以太利にては十三世紀の後半 ダンテ・アルギエリ 出て神戲ゴットフリートの名篇を著はし次で第十四紀に至り フランチェスコ・ペトラルカ 現れて希臘拉丁の古學を研究し又塵埃中に埋没せる古寫本を發見して古語の文法及び古人の思想を學べり同時に ギオヴンニ・ボッカチオ 又其舉に加はり大に古文學の復興を唱へたりき加ふるに東帝國の末路 コンスタンチノポリスの學者貴重なる希臘の古書を抱きて以太利に來りしより古學の探究爲めに一層の進歩をなし次で十

ダンテ

ペトラルカ

ボッカチオ

フマニスト

活板の發明

五世紀の末葉に至りては古文學の探究歐洲到る所に行はれたり當時古文學の探究に従事せる徒を總稱して フマニスト といひ其主義を フマニズム といへり フマニストは何れの國人たるを問はず互に同朋の如く相扶助し常に氣脈を通じて智識を交換し各地に歴遊して古書斷簡を搜索し且つ之を摸寫して同好の士に領ち又之を保存せんが爲めに數多の書庫を建築せり而して古文學研究に與りて最も力ある者を活板の發明となす。

古代の書籍は専はら奴隸の謄寫せる者にして中世に至り僧侶等閑暇なるを以て頻に經典を手寫せしが人智發達して讀書の必要一般に起るに及び初めて寫字生なる者出でたり後年金屬板及び木板に文字を彫りて印刷するを發明せし



が終に活板を發明せり。而して金屬を以て活字を製せしは紀元一四三六年頃、マインツの人、ヨハン・グーテベルヒの發明を以て嚆矢とす。次で、シエツフェルなる者之を改良して大に印刷術を進歩せしめ、後數年を出でず印刷術歐洲諸國に傳播し、常人も容易に書籍を有するを得て開明の思想陸續發達せり。

美術上の復活

美術上の復活　文學美術の發達は人心の進歩に伴ふ者なれば、古學の復興と共に古代美術の復興も又盛に行はれたり。中世の美術は悉く宗教の臭味を帯び、建築の如きは沉重幽靜なる圓弓形のローマチスク風なりしが、十字軍時代に至り、歐洲人の進んで取らんとする思想は建築上にも又現はれ、宏壯魏々たる尖弓形のゴチック風を出せり。然れども宗

建築

繪畫彫刻

教の臭味は猶未だ脱すること能はず、古學復興と共に古代の美術復活するに及び、遂に完全優美の建築風起れり。

繪畫彫刻の術も又大に衰微し、ゴチック時代に至りて復興せしが、信神を主とし、美麗を勉むるの極、活動變化を有せざる者多かりき。然るに十五世紀に至り、フヒレンセに諸種の流派勃興して各其弊を矯め、次で十五世紀の後半には、繪畫に、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエレ・サンチヨ、チチアノ・デ・チエリオ等の大畫伯彫刻に、ドナテロー、ミケランヂエロ、プロナロッチ等の妙手輩出して、非凡の傑作陸續世に現はれたり。就中、ミケランヂエロは繪畫を能くし又建築にも通ぜり。